

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第3集

倉林後遺跡

1 9 8 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第3集

くら ばやし うしろ
倉 林 後 遺 跡

1 9 8 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

県立高等学校の増設、並びに施設の拡充は、本県教育行政の最重要政策の一つとなっております。

今回の県立児玉農工高等学校豚舎増設に関しては、関係各位の十分な協議にもかかわらず、敷地内に於ける埋蔵文化財の取扱いについては、やむなく記録保存の措置を講ずる結果となりました。

発掘調査は、県教育局財務課の委託を受け、当事業団がこれに当たり、その結果貴重な成果を納めることができました。

ここに埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第3集として記録いたしましたので、本書並びに資料を学術研究および学校教育に大いに役立てていただきたいと思います。

発掘から報告書の刊行に至るまで、終始御指導、御協力を寄せられた関係各位に深く感謝申し上げると共に、厳しい真夏日に発掘に携わられた方々に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和 56 年 3 月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 関根秋夫

例　　言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町金屋字倉林後に所在する「倉林後遺跡」（児玉町№76遺跡）の発掘調査（昭和55年、委保第5の2239）報告書である。本遺跡を、一時、既に報告されている「金屋池脇遺跡」と同一のものとして処理したが、遺跡の広がりを吟味した結果、別遺跡とすることになった。
2. 発掘調査は、県立児玉農工高等学校の新豚舎建設に伴う事前調査及び一部校庭内の遺跡確認調査であり、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。
3. 発掘調査は山下秀樹、利根川章彦が担当し、1980年5月22日～同年7月31日に亘って実施した。
4. 本書図版作成に当っては、土器の実測、カマドの詳細図は利根川が、遺構・遺物分布関係の図は山下が担当した。遺物写真は山下が撮影した。
5. 本書の執筆者は、各文末に記した。自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。炭化材樹種鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社を通して、さらに東京大学農学部森林植物学教室の鈴木三男氏に依頼した。
6. 遺跡原点は測量法に基づく公共座標
 $X +20,694,000$ $Y -64,078,000$ 海拔高度 106.146m である。
座標を引き出すために三等三角点「金谷」を使用し、標高は水準点 №017-0885海拔53.579mを使用した。なお、本基準点測量は、中央航業株式会社に委託した。
7. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第四課職員があたり、横川好富が監修した。
8. 本書の作成に当り、以下の方々から指導、助言をいただいた。(五十音順)
笠原信男、坂本和俊、鈴木徳雄、三上元一、武笠多恵子

＜発掘参加者＞

市川フク、倉林照子、倉林富江、倉林トミ子、倉林久子、倉林やす子、渋谷よし、清水きみ枝、中村福江

目 次

序

例 言

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	遺跡の概観	7
IV	調査の経過	9
V	遺構	10
1	住居跡	10
a	カマド	14
2	土 壤	16
a	1号土壤	16
b	2号土壤	16
VI	遺物	18
1	土 器	18
2	鉄 製 品	24
3	石 製 品	24
VII	その他の遺構	25
VIII	自然科学分析	27
1	花粉分析	27
2	炭化材樹種鑑定	33
3	重鉱物分析	35
IX	考 察	39
付 載		
1	児玉農工高校内試掘調査結果	46
2	金屋池脇遺跡発掘資料	48
3	倉林英夫氏表採資料	49

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	5	第16図 出土遺物	24
第2図 遺跡周辺地形図	6	第17図 3~6号土壤図	26
第3図 地層断面図	7	第18図 分析用土壤サンプル採取位置図	31
第4図 遺構分布図	8	第19図 主要花粉・胞子化石ダイアグラム	32
第5図 集石	10	第20図 重鉱物分析用土壤サンプル採取位置図	35
第6図 住居跡遺構図	11	第21図 重鉱物分析結果	折り込み付載
第7図 住居跡内遺物分布図	12	第1図 第14号トレンチ東壁セクション図	47
第8図 住居跡掘り方図	13	第2図 金屋池駒遺跡出土土器	48
第9図 貯蔵穴内遺物分布図	14	第3図 倉林英夫氏表採資料	49
第10図 カマド平・断面図	折り込み		
第11図 カマド遺物分布図	15		
第12図 1号土壤図	17		
第13図 2号土壤図	17		
第14図 出土遺物	19		
第15図 出土遺物	23		

表 目 次

表1 児玉町周辺の遺跡地名表
表2 花粉分析試料表
表3 花粉分析結果一覧表

表4 炭化材樹種鑑定結果一覧表
表5 重鉱物分析結果一覧表

図 版 目 次

1 遺跡全景(航空写真)	5 カマド内甕出土状態
2 深掘セクション	カマド内甕出土状態
住居跡内遺物出土状態	6 カマド内支脚(高环)出土状態
3 カマド前部遺物出土状態	カマド完掘
カマド周辺遺物出土状態	7 貯蔵穴内遺物出土状態
4 カマド右袖外側の遺物出土状態	集石出土状態
カマド周辺完掘状態	8 住居跡完掘状態

- 住居跡たちわり
- 9 1号土壤
2号土壤
- 10 3号土壤
4号土壤
- 11 5号土壤
6号土壤
- 12 鉱物分析用土壤サンプル採取状態
遺跡完掘状態
- 13 試掘2号トレーナー
試掘3号トレーナー
- 14~16 出土遺物
- 17 倉林英夫氏採集遺物
- 18 ①広葉樹（クリ？）根
- 19 ②カシ類一種
- 20 ③広葉樹 根 ④広葉樹 枝
⑤クヌギ
- 21 ⑥クヌギ ⑦クヌギ ⑧カシ類一種
- 22 ⑨カシ類一種 ⑩カシ類一種
⑪カシ類一種
- 23 ⑫単子葉
- 24 ⑬広葉樹（コナラ属？）根
⑭広葉樹 枝
- 25 ⑮広葉樹 枝

I 調査に至る経過

埼玉県文化財保護課では、近年増加しつつある開発と、これに係る埋蔵文化財の保護・保存の調整をはかるため、例年予算編成期前に府内各部局及び国・公社・公團の開発方面と事業計画のヒヤリングを実施している。昭和54年11月7日に浦和市コミュニティーセンターで開催した県関係機関との調整会議に於いて、教育局財務課から提出された昭和55年度事業計画の中に県立児玉農工高校の実習養豚場建設が予定されていた。

計画では現校舎西側に約4,000m²を整地した後コンクリートの基礎を打つ近代的設備を有する豚舎である。しかし同地は校舎敷地を含め校庭並びに広くその周辺が埼玉県遺跡地図、同地名表によるところの児玉町No.76遺跡として登載されているものであった。

このため養豚場建設計画の中止あるいは変更が可能かどうか検討を財務課に依頼したが、学校側とも種々協議、検討を重ねた結果、すでに既存の豚舎が老朽化し充分な実習ができず、又他に適当な代替地がないなどのことから新養豚場の建設はやむを得ないと回答があり、記録保存のための調査を実施して工事計画を進めるという方針が決定した。

このため予算編成期でもあり文化財保護課ではとり急ぎ調査経費の見積りを積算し財務課に提出して、昭和55年度に調査が可能となるよう米年度予算に計上するよう申し入れた。

たまたま昭和55年4月1日から文化財保護課に組織上の変更があり、発掘調査の実施については新しく設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団）が当ることになった。

昭和55年5月に入り、具体的な準備が進められたが、現地の状況は過去に於いて一部表土が削平されている部分があり、遺跡の保存状態があまり良好でないため、事前に試掘調査を実施し、この結果を待って調査計画を立案することとした。

埋文事業団では昭和55年5月22日調査研究部第3課の水村孝行主任調査員が現地におもむき重機を使用して試掘調査を実施した。

埋文事業団では本調査実施にあたり地元児玉町教育委員会と連絡をはかり、作業員の募集等協力方を依頼した。そして教育局財務課から文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を、埋文事業団から同法57条の1の規定に基づく発掘調査通知を各々児玉町教育委員会を経由して県教育委員会に提出された。文化財保護課ではこれを文化財長官へ進呈し法的手続を完了した。

かくて、昭和56年5月26日から発掘調査が開始された。

(駒宮史朗)

発掘調査の組織

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	関 根 秋 夫
		副 理 事 長	本 郷 春 治
		常 務 理 事	渡 辺 清 夫
庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悅 光
			関 野 栄 一
			福 田 浩
			本 庄 朗 人
発 挖 及び 整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研究 部 長	横 川 好 富
		調査研究部第四課長	増 田 逸 朗
		調 査 主 任	水 村 孝 行
			利根川 章 彦
			山 下 秀 樹
協 力 者	児玉郡児玉町教育委員会、県立児玉農工高等学校		
	地元区長及び地元住民		

Ⅱ 遺跡の立地と環境

倉林後遺跡は埼玉県児玉郡児玉町大字金屋に所在し、国鉄八高線児玉駅の西方約1.8kmの位置に当っている。地球上の位置は、東経 $139^{\circ}7'15''$ 、北緯 $36^{\circ}11'$ 付近である。

児玉郡は古代においては賀美・那珂・児玉の三郡に分割されており、面積の狭隘な割には人口集中地域である。これに対し、現在の児玉町は人口19,000人ほどで、国道254号線沿い、および駅周辺に広がる市街地を抜けると、水田、桑畠ばかりが目につく田園地帯が広がっている。

当遺跡は、秩父山系より流出し、やがては利根川に合流する小山川の一支流女堀川が開削した小支谷のやや奥まった部分の台地上に占地し、大変規模の大きな集落遺跡であることが予想されている。今回の発掘の結果を見る限り、当遺跡は古墳時代前期～後期にかけて何時期かに亘って形成されていると判断される。当遺跡と約250mを隔てて東に、故小沢国平氏の調査による、金屋池脇遺跡が所在する。当初、当遺跡もこの遺跡の連続部分であると考えられていたが、前述のごとく、間に小さな谷が所在し、隣接する別の遺跡と考える方が妥当性が高い。金屋池脇遺跡は五領後半の方形周溝墓が一基検出されているが（小沢 1969）、その周辺は校舎の造成のためすでに削平されている。近傍には、他にもいくつかの舌状台地が所在し、いずれも古墳時代～平安時代の遺跡をのせており。当遺跡の対岸は枇杷橋遺跡（方形周溝墓、和泉期前半・国分期後半集落跡）（菅谷・駒宮他 1974）で、さらに一つ先の台地上はミカド遺跡（鬼高期前半集落跡）である。これらは調査されていて、特にミカド遺跡は在地産のものを含む多量の古式須恵器を出土し、70軒以上の竪穴住居跡を発掘しており、当遺跡周辺の遺跡群中最高の出土品量を誇っている。また東方に伸びる尾根続きの台地上にも弥生時代のもの（甲西浦地内）を含む古墳時代～奈良・平安時代の集落遺跡が散在する。これら集落群の南方、同じ丘陵の南側斜面に帶状に広がるのが長沖古墳群である。既に、29基が調査され、11基以上がそれ以外の原因で消滅しているが、前方後円墳5基を含み100基を越える墳丘の存在が認められており、往時は300基を上まわったものと思われる。まさに「古墳の集落」の観を呈していたであろう。これらは、5世紀中葉から7世紀後半にかけて築造され、当地の埴輪の発生や、横穴式石室の受容を考える良好な内容をもっている。（菅谷・金子・鈴木・萩原・山崎他 1980）

長沖古墳群の西方にも小さな谷を隔てて高柳古墳群（現在43基）が所在するし、ミカド遺跡などの背後にあたる飯倉地区にも飯倉古墳群が所在する。台地平坦部から北・東側の斜面に広がる集落群の墓域として台地東部と南側斜面の古墳群が対応するという構図を考えることができよう。

ミカド遺跡の北に、東西に長く広がる台地上にも奈良・平安時代の大きな集落群があるが、これらは、谷水田に依存していた前代の集落群と異なり、東方に広がる条里水田（児玉町、No.120遺跡）を背景に存在したのである。

これらの遺跡群に対し、小山川を挟んだ対岸にも、小平古墳群、秋山古墳群等の大小の古墳群が存在する。秋山古墳群には胴張り形態の大きな横穴式石室を開口する庚申塚古墳（小沢 1958）がある。この周辺は低地に古墳時代の集落、その上の台地上から斜面にかけて奈良・平安時代の集落

が所在するが、未調査のため、立地の違いがそれほど明瞭に出るかどうかは不明である。

女堀川・身鶴川（小山川）の中流域の生野山丘陵・浅見山分離丘陵の上やその周辺の低地にも多くの古墳群・集落跡が所在する。中でも、入浅見鷲山古墳・下浅見金鏡神社古墳・生野山銚子塚古墳等の系列化した首長墓群、南側尾根上の生野山古墳群（小沢・菅谷・駒宮 1973）、170基を越え、方形周溝墓9基をも含む塚本山古墳群（増田・小久保 1977）、五領～鬼高Ⅱ期の大集落後張遺跡（増田・宮崎 1977）、五領・真間・国分区の大集落雷電下遺跡（駒宮・大和 1979）、前方後円墳4基を含み、77基が調査された広木大町古墳群（菅谷・笹森 1975、小潤・中村 1980）、公卿塚古墳（菅谷 1970）を中心とする東富田古墳群等は注目すべき内容をもち、今後検討を要するものである。

（利根川章彦）

表1 埼玉町周辺の遺跡地名表

〔古墳時代および奈良・平安時代の集落跡〕

- 1 倉林後遺跡（五領、和泉Ⅰ、鬼高Ⅰ～Ⅱ）
- 2 金屋池脇遺跡（五領Ⅱ）
- 3 ミカド遺跡（和泉Ⅰ～鬼高Ⅰ）
- 4 朝霧神社前遺跡（鬼高Ⅰ～Ⅱ、真間、国分）
- 5 北貝戸遺跡（五領、和泉）
- 6 糸之口遺跡（和泉Ⅰ）
- 7 東谷遺跡（和泉Ⅰ～鬼高Ⅰ）
- 8 下田遺跡（五領Ⅱ、和泉Ⅰ、鬼高Ⅰ～Ⅱ、国分）
- 9 後張遺跡（五領、和泉Ⅰ～鬼高Ⅰ、国分）
- 10 謙訪遺跡（五領、和泉Ⅰ～鬼高Ⅰ、鬼高Ⅱ大溝）
- 11 共和小学校遺跡（和泉Ⅰ～鬼高Ⅰ）
- 12 中道・西北原遺跡（鬼高Ⅰ～Ⅱ）
- 13 精神場遺跡（鬼高Ⅰ～Ⅱ）
- 14 櫻杷橋遺跡（五領、和泉Ⅰ、国分）
- 15 雷電下遺跡（五領Ⅱ、真間、国分）
- 16 御林下遺跡（国分）
- 17 立野南遺跡（鬼高Ⅰ、真間、国分）
- 18 將監塚遺跡（真間、国分）
- 19 植下・毛樹原・下原遺跡（真間、国分）

〔古墳群・群集墳〕

- 20 長沖古墳群
- 21 高柳古墳群
- 22 西小平古墳群
- 23 秋山古墳群
- 24 広木大町古墳群
- 25 大仏古墳群
- 26 胸衣古墳群
- 27 塚本山古墳群
- 28 大久保山古墳群
- 29 生野山古墳群
- 30 元阿保古墳群
- 31 丹荘古墳群
- 32 北塚原・南塚原古墳群
- 33 二の宮古墳群
- 34 十二ヶ谷戸古墳群
- 35 城戸野古墳群
- 36 白岩古墳群
- 37 飯倉古墳群
- 38 下町古墳群
- 39 東富田古墳群

〔方形周溝墓〕

- 40 鮫玉東遺跡
- 41 塚本山古墳群
- 42 生野山78号墳
- 43 塩谷地区遺跡

〔前期古墳・前方後円墳〕

- A 下浅見鷲山古墳（径50m、5c. 初）
- B 入浅見金鏡神社古墳（径40m、5c. 半）
- C 生野山銚子塚古墳（長58m、6c. 初）
- D 生野山16号墳（長58m）
- E 生野山9号墳（径44m、5c. 後半）
- F 生野山将軍塚古墳（径60m、5c. 半～後半）
- G 大町両子塚古墳（長28m）
- H 大町8号墳（長38.5m）
- I 大町9号墳（長43m）
- J 大町40号墳（長43m）
- K 長沖31号墳（長50.4m）
- L 長沖32号墳（長32.8m）
- M 長沖25号墳（長40m）
- N 長沖十兵衛塚古墳（長37m）
- O 前山2号墳（径28m、5c. 前半）
- P 前山1号墳（径40m、5c. 半）
- Q 公卿塚古墳（径50m、5c. 半）
- R 七色塚古墳（長不詳）
- S 元阿保種種神社古墳（長不詳）
- T 中新里諏訪山古墳（長42m）
- U 南塚原9号墳（長24.5m）
- V 北塚原9号墳（長29m）
- W 白岩銚子塚古墳（長46m）
- X 大仏二子塚古墳（長43m）

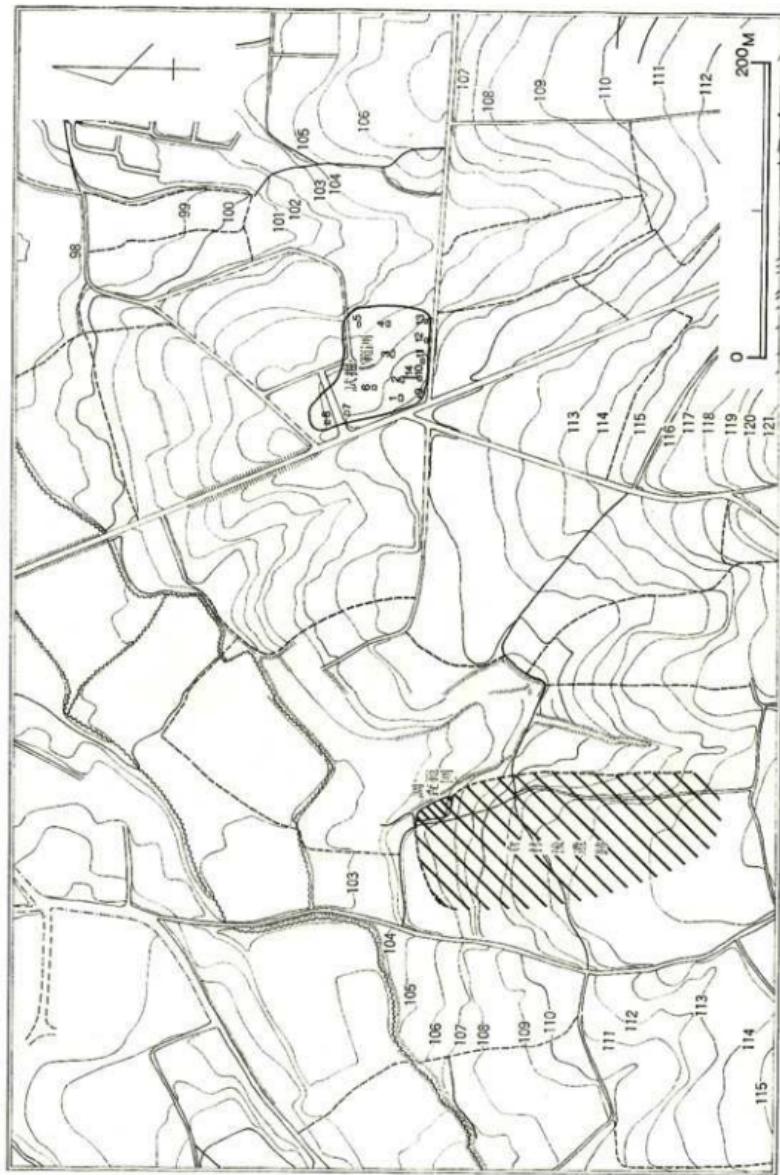
〔寺院跡〕

- 44 净土野（緑野）庵寺
- 45 大仏庵寺

※前期古墳・前方後円墳の数値は円墳の直径・前方後円墳の全長である。



第1図 遺 跡 位 置 図

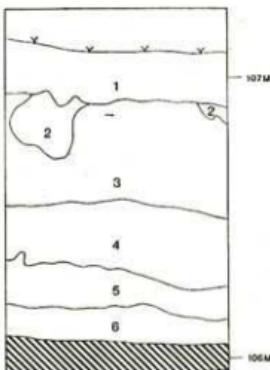


第2図 遺跡周辺地形図

III 遺跡の概観

遺跡は、上武山地から北に延びる尾根を背後にひかえた洪積台地縁の北西斜面に立地する（第1図）。遺跡前面には、水田地帯が広がっている。台地は開析が進行しており、一見丘陵地と見紛うが、小山川の扇状地地形と考えられる。遺跡内の自然堆積層を観察する（第3図）と、耕作土下にはローム層が約60cm堆積し、その下には粘土の不透水層が広がっている。粘土層下部では、徐々に指頭大の小円礫を含むようになり、水成堆積を示唆するものである。粘土層上部は非常に水分が多く當時粘着性に富むが、降雨の見られた時などにはその部分から水の湧出が認められる。

- 1 黒褐色土 粘性弱。耕作土。砂質シルト。下部に指頭大のロームブロックを少量含む。灰白色バミスを含む。
- 2 黄褐色ソフトローム 粘性弱。木根等により、部分的にシミ状の黒味を帯びる。1層に較べバミスの含有量が少ない。
- 3 黄褐色ハードローム 粘性弱。しまりがよく固い。シルト分が多いがやや砂質。下層ほど粒度が細くなる。上層の方に灰白色バミスが多く含まれる。
- 4 暗黄褐色ハードローム 粘性中。しまりがよく固い。3層に較べ粒度が細かくよりシルト質。3層との境は漸移しており明瞭でない。
- 5 赤褐色粘質土 粘性強。しまり悪くやわらかい。含水性高い。特徴が明瞭で、分層は容易。
- 6 灰黄色粘質土 粘性強。しまりよく固い。少量の指頭大の礫を含む。不透水層らしく、水田の底土に似る。5層ほど含水性は高くない。黒色や紫色の鉄分らしい沈澱物粒を多く含む。本層が原因で5層の含水性が高くなるらしい。



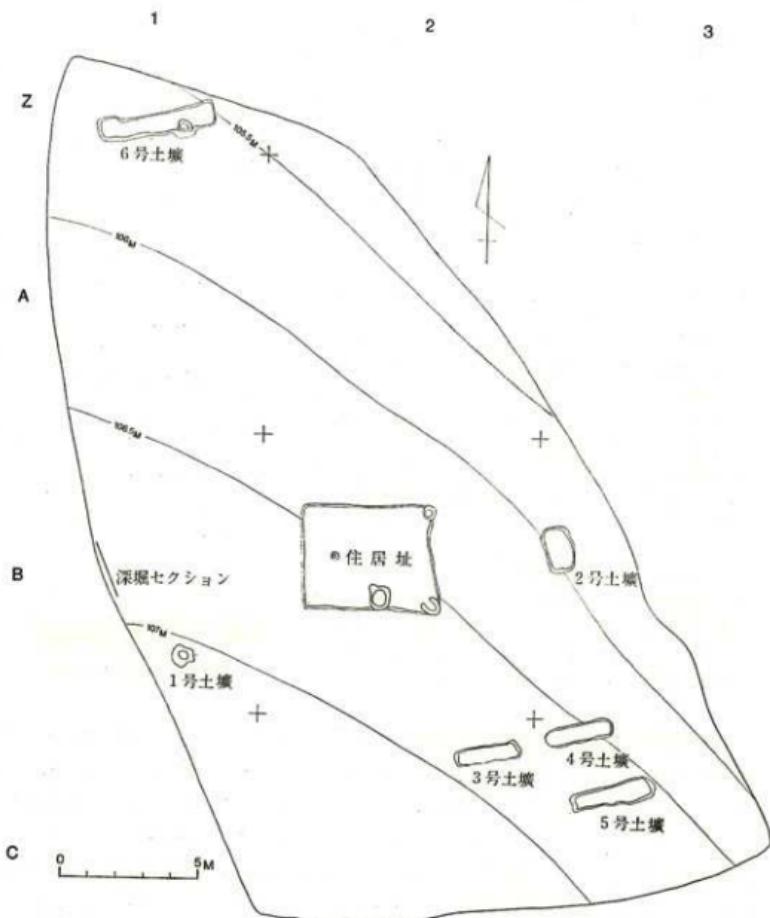
第3図 地層断面図

今回、発掘調査を実施した範囲は、約4000m²に達するが、その大部分が高等学校の農地として、旧河谷を埋め立てた所とそのために採土された所で占められており、遺構の残存が認められ、旧地形を保つと考えられるのは、わずかに500m²ほどである（第4図）。海拔高度は105.5~107m余りの範囲である。なお、調査に当ってのグリッドの設定については、第4図を参照していただきたい。

発掘では、住居跡一軒、土墳6基が発見された。住居跡は、和泉末から鬼高初頭と考えられるものである（V章1節）。これに伴なうと考えられる土墳は、1号と2号のみである（V章2節）。3~6号土墳は、掘り方や覆土の状況、伴出遺物などから判断して明治以降のものと考えられる（VII章）。3~5号土墳は、三者が関連あるかの如く並んで配置され、形状も酷似する。

発掘調査面積に較べ、遺跡の広がりは相当なものと思われる。調査中に踏査した結果では、少なくとも本調査区から西方100m、南方200m位までは間断なく土師器片の分布を認めることができる。また、調査区南西方向約80m離れた所では、地境に出来た土層断面部に、明らかな住居跡の落ち込みが観察できる。

（山下秀樹）



第4圖 遺構分布図

V 調査の経過

調査は、昭和55年5月22日、ブルドーザーによる表土除去・遺構確認により開始された。この結果、調査区北部にのみ遺構の存在することが判明した。5月23日～5月31日の間に発掘器材の搬入・事務所の施工・整理等本調査の準備を完了した。以下調査の進行状況を示す。

6月10・11日 遺構確認。調査区北部を中心に行ない、住居跡1軒、土壙6基の平面プランを確認した。11日には住居跡東西の土壙（1・2号）を掘り始める。

6月12日・13日 1・2号土壙完掘。土層断面図・平面図作成し、写真撮影も完了。住居跡に6ヶ所の土壙サンプリング・ブロックを設定し、掘り下げ始める。また、ローム層の自然堆積状態を観察するトレチを設定し、掘り下げ・土層断面図作成・写真撮影を行なう。

6月16日～20日 住居跡は床面まで掘り下げ、土器出土状態写真撮影・床面精査を行なう。この段階で南壁に貯蔵穴があることを確認する。住居跡南の土壙3基（3～5号）を掘り下げ、土層断面図を作成する。4・5号土壙は完掘する。

また、16日より、現豚舎の周辺の遺構分布を確認するために、試掘坑を設定し、4ヶ所を完掘する。一部土層断面図も作成。18・19日住居跡の土壙サンプルを採取する。

6月23日～27日 住居跡はサンプリング・ブロックの土層断面図を作成し、5cmごとに土壙を採取しながらブロックを除去した。南東コーナーのブロック除去中、カマドが確認されたのでカマドの精査も行なう。住居跡覆土の土層断面図を作成する。新たに発掘区北端の6号土壙を掘り、3号と共に完掘した。3・6号土壙土層断面図、3・6号土壙平面図、エレベーション図作成。現豚舎付近の試掘坑は新たに4基完掘し、1基は土層断面図を作成する。

6月30日～7月4日 住居跡は覆土セクション・ベルトを排除し、北東コーナーにピットを検出する。カマド周辺の一括土器の出土状態を撮影し、実測後ただちに取り上げた。土壙についてはすべての作業を終了し、遺構写真撮影を行なう。試掘坑は新たに6ヶ所（9～14号）を設定し、9～13号坑までは完掘する。7月3日発掘区現況を航空写真撮影する。

7月7日～11日 住居跡は5ヶ所のサンプリング・ブロック以外の部分をすべて床面まで掘り下げた。貯蔵穴・カマドを掘り始める。試掘坑はたび重なる雨天のために、ほとんど調査できなかつた。

7月14日～18日 住居跡床面に検出された集石の実測・写真撮影。貯蔵穴は土層断面図をとり完掘する。住居跡内のピットの平面図・断面図を作成し、住居跡全体の平面実測も行なう。18日、発掘区全体の写真撮影。試掘坑は湧水のため難航するが、すべてを完掘した。

7月21日～25日 住居跡の平面図を完成し、エレベーション図も作成する。試掘坑は最後の土層断面図を作成し、24日に埋めもどしを完了し、試掘調査を終了した。

7月28日～31日 28日住居跡写真撮影。その後住居跡の床面をたち割り、カマドの切断も終了し、「掘り方」の断面図・平面図を作成する。31日事務所の整理を行ない、すべての調査を完了する。

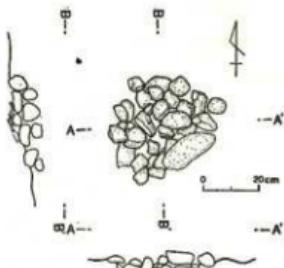
（利根川章彦）

V 遺構

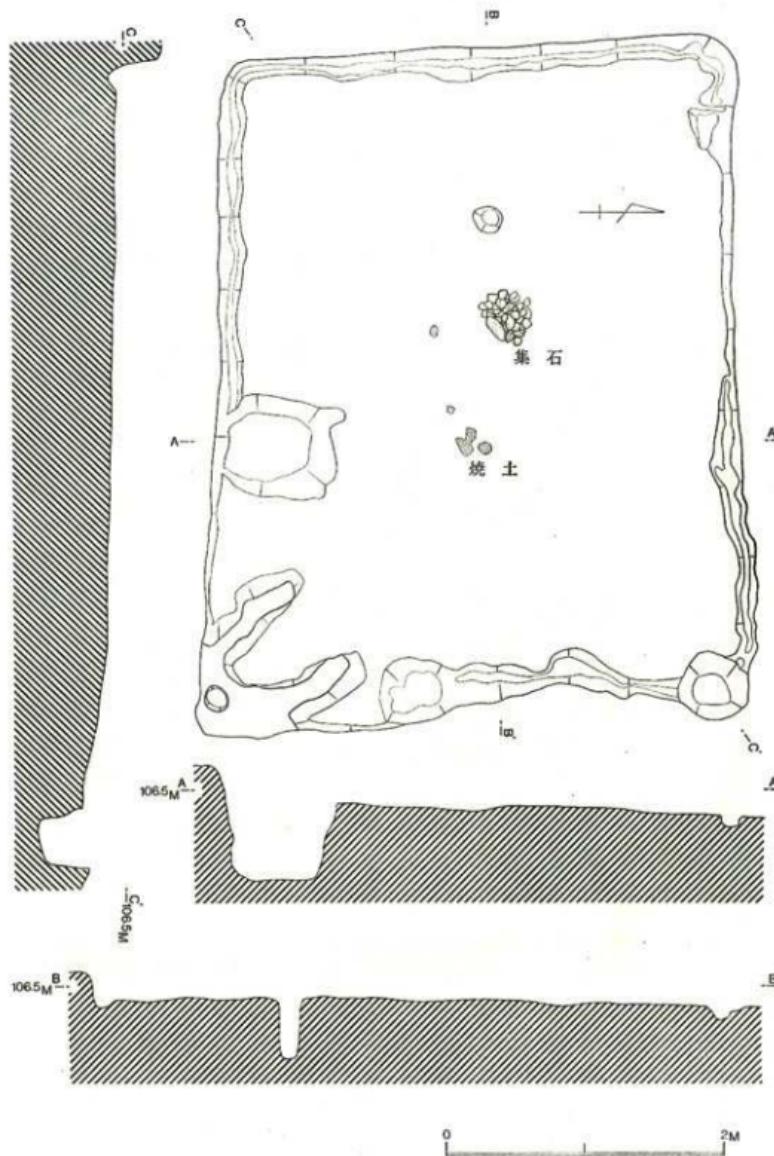
1 住居跡

唯一発見された住居跡は、平面形で、約 4×5 mを計り、矩形に近い不正長方形を呈する（第6図）。Ⅲ章に見る如く緩斜面に位置し、低い方でやや広くなっている。床面はほとんど水平である。住居跡中央部では固くしまっているが、周辺部では柔かい。また中央部には炉址の存在は認められないが、床面の数ヶ所に焼けた痕跡が認められた。壁溝は明瞭でない。幅5~10cm、深さ5cm内外のものが、カマドの設けられた一隅を除いて巡っている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最も高い南西隅で約35cmを計る。最も低い北東隅は、斜面の浸食と後世の耕作のためか、立ち上がりは不鮮明で、わずかに墻溝の追跡によってプランが認定できる程度である。検出できた柱穴は一本のみで、径約20cm、深さ約40cmである。住居跡中央西寄りに位置し、ほぼ鉛直に掘り込まれている。貯蔵穴は南壁にそって、ほぼ中央に掘られている。平面形は約75×70cmの不正隅丸長方形を呈し、深さは床面から約60cmを計る。貯蔵穴は、自然堆積層に認められる赤褐色粘質土、さらには灰黄色粘質土をも掘り抜いており、一度雨が降ると、貯蔵穴内は、水が湧くような高湿度の状態に置かれたものと考えられる（第8図）。カマドは住居跡の対角線にそろのように、焚き口を中心に向かって、南東隅に作られている。煙道は、丁度住居跡コーナーの内壁にそっている（Ⅳ章1節a項参照）。

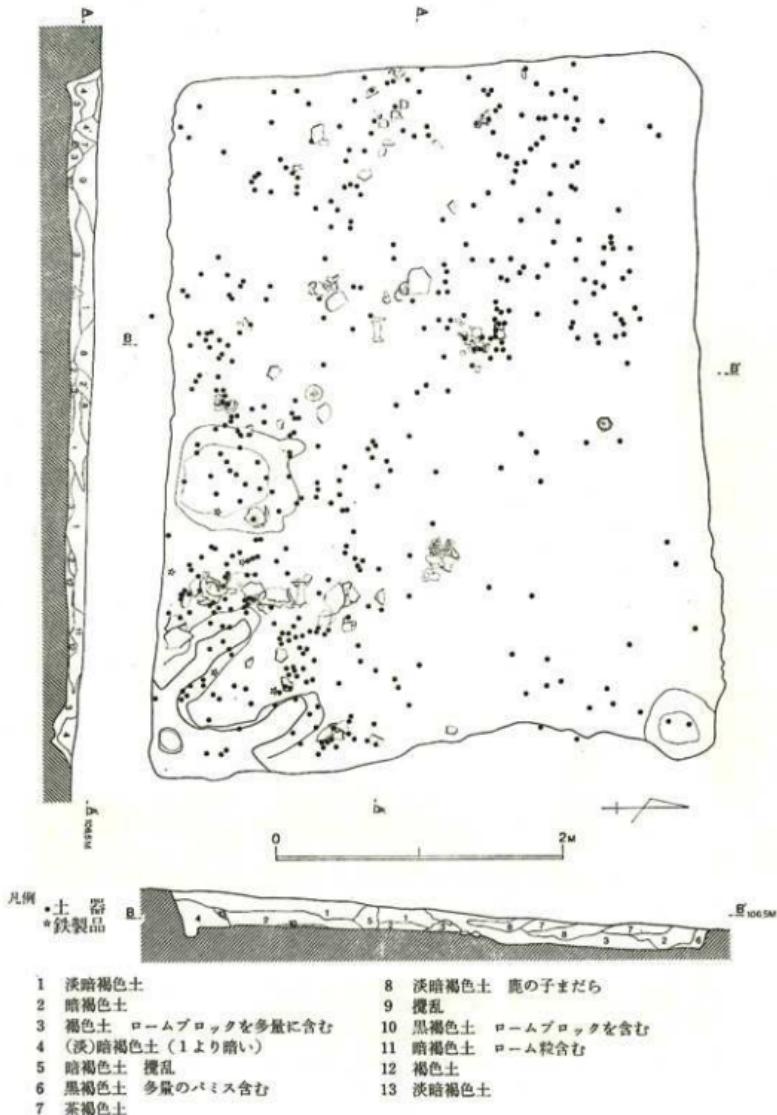
これらの他に、ピットと集石が検出されているが、いずれも性格は不明である。ピットは、北東コーナーに位置し、丁度壁の線上に重なる。口径約45cm、深さ約35cmを計り、平面形はほぼ円形を呈する。集石は径5~8cm位の礫を主体にし、10cmを越えるものを少量含み、これらが径40cm位の範囲に集中して分布している（第5図）。多くの礫が熱を受けたようで、表面に薄い剥落痕を持ち、やや赤色を呈する。構成礫は火成岩が主体となり、数点のチャート、片岩などが含まれる。また、集石中に土師器片も安定して含まれている。しかしこの集石がプライマリーなものか、擾乱によって生じたものなのかについて、一石を投じる資料が出土している。それは、数ヶ所に鉄分を包み込むガラス質の溶結したもので、集石の最下底部からみつかっている。これは、鉄分の付着状態からして、窯壁とするより、小鍛冶との関連が想起される資料であるが、本住居跡の該当する時期では、なお尚早として、その存在が危ぶまれるのである。また同様の遺物は、遺跡周辺の耕作土中に広範に含まれているとのことで、付近の人々には「カナタソ」と呼ばれている。事実、付載1に報告した試掘地域内でも同様のものがかなり採集されている。そこで小鍛冶の存在を肯定する立場から考えてみると、まず「カナタソ」の広範な分布から、本遺跡周辺に相当規模の小鍛冶を伴うような遺跡を想定する必要がある。そして、「カナタソ」を含む土砂が本遺跡と同時期以降のこの丘陵に分布して



第5図 集石

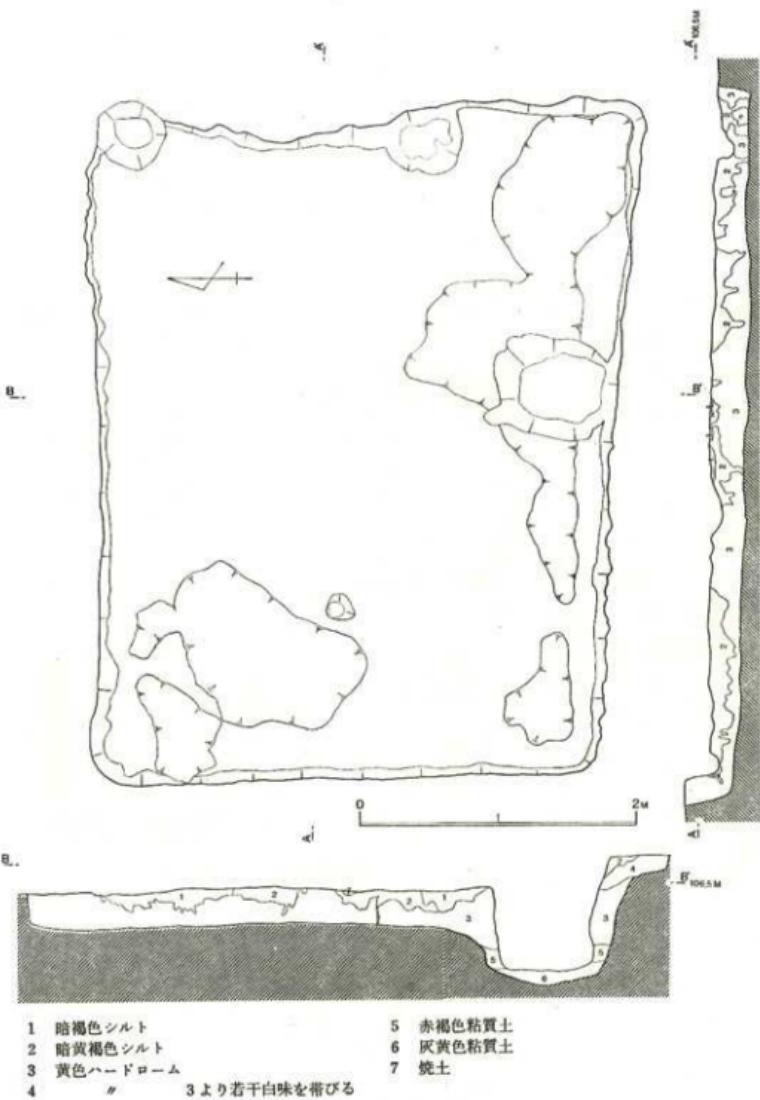


第6図 住居跡 遺構図



第7図 住居跡内遺物分布図

いたとすれば、本遺跡の住居跡・土壤を埋積する覆土中にも何等かの痕跡を残すはずである。しかしこれらに対する答はいずれも否定的である。少なくとも今まで、この開拓の進んだ倉林地区の

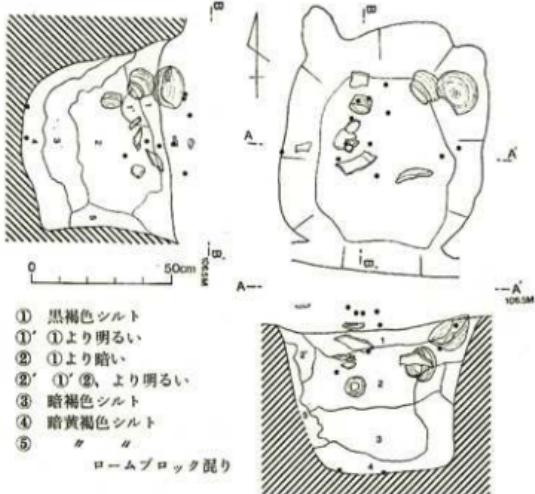


第8図 住居跡 掘り方図

丘陵地で、そうした遺跡として知られる所はない。また、遺構の覆土中からは、住居跡を除いて「カナクソ」の出土は全く認められない。住居跡での出土状態には偏りがあり、B及びCサンプリング・ブロックから検出されたのみである。これらは、花粉分析用の土壤サンプルを採取するために、角柱状に掘り残しておいた区画で（第18図）、「カナクソ」は水洗した土壤中から発見されている。これらは、直径1~5mm程度の小さなものである。BブロックではNo.1~4、CではNo.1・2サンプルから検出されている。Bブロックでは、表層から床面直上まで途切れることなく含まれていることがわかる。A・DブロックとCブロック下半に全く含まれていないことを考えると、Bブロックを設定した位置から集石・Cブロックの位置にかけて、判然としないながらも何等かの特殊な条件を考えざるを得ない。その条件の故に、部分的に「カナクソ」が出土するような状態が招米されたのであろう。なお、集石が攪乱か否かについては、すでに住居跡覆土観察用のセクションペルトを検討した段階から問題となっていたが、いずれについても決定打を欠いている。ここでは、状況を説明するに止めた。類例の検索に努めるとともに、多くの方々の教示を願う次第である。

遺物は、土師器739点、

鉄製品7点、滑石製品2点が発見されている。住居跡内の遺物の分布には、顕著な特徴は認められなかった（第7図）。覆土の厚さに比例して、北東隅では遺物が少なかつた。カマドの右袖部外側に多量の土師器が認められ、甕形土器（第15図28）、高杯（第14図11）などに復元された。貯蔵穴内からは、完形の手捏ね土器（第14図7）、塊形土器（第14図2）などが出土している。貯蔵穴内の土器は、浅い部分に集中的に含まれており、底面からは2片出土したのみである（第9図）。



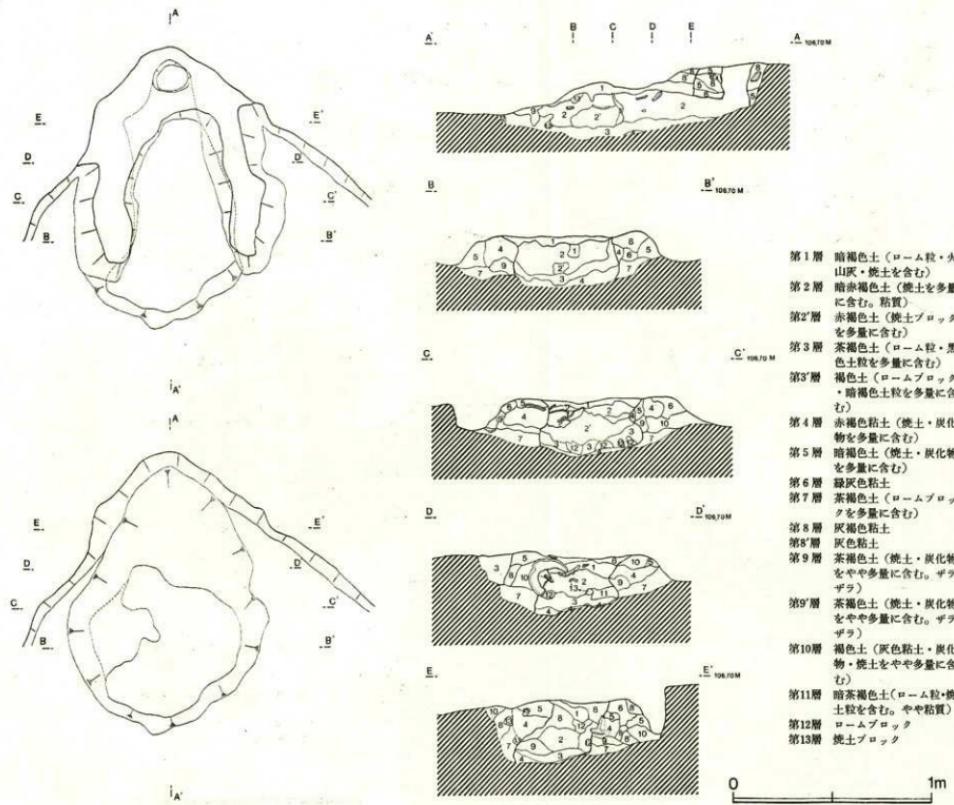
第9図 貯蔵穴内遺物分布図

住居の掘り方も特徴的と呼ぶほどのものではない（第8図）。北西隅と南壁に近く、やや深く掘り下げた痕跡が認められるが、意識的に床を貼る等の技術は明瞭でない。カマドの部分も、焚き口がそれほど掘り下げられていなかったことと相俟って、掘り方は浅かった。

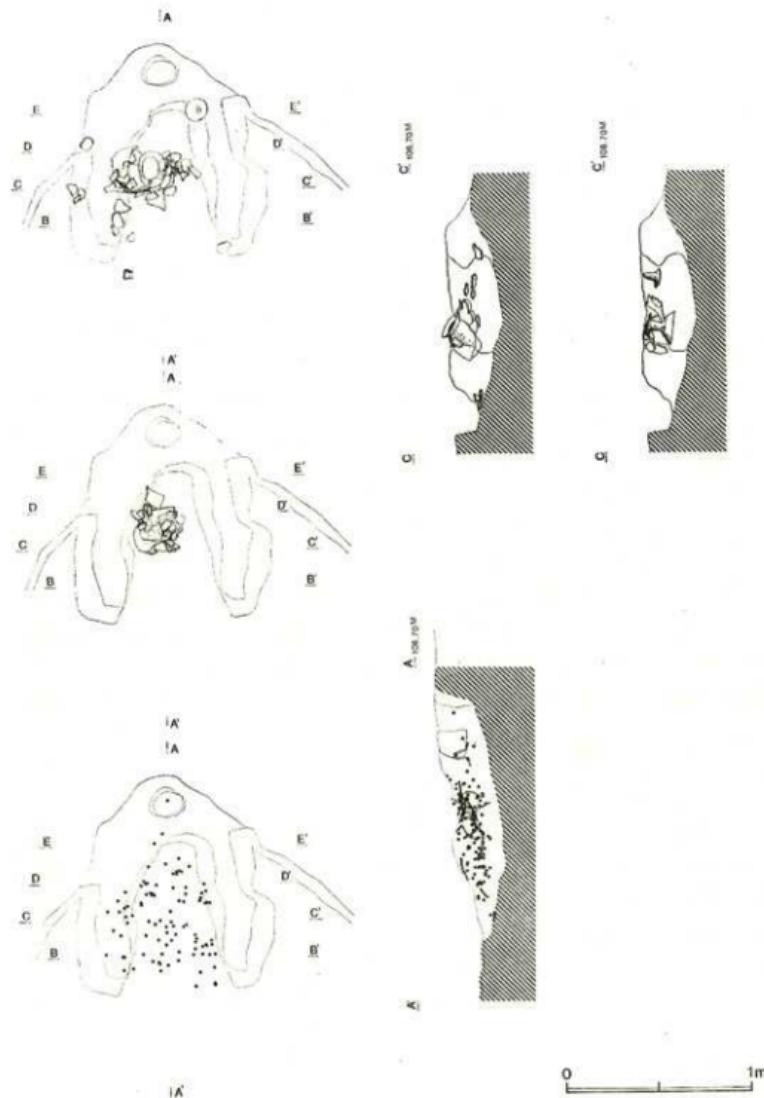
（山下秀樹）

a 力マト

カマドの主軸方向はN-147.3°-Eで南壁面に対して53°ほどの傾きをもっている。貯蔵穴はカマドの右袖の付け根部分の1m右になる。壁溝は貯蔵穴と、カマド北側の深いピットまで止まり、



第10図 カマド平・断面図



第11図 カマド遺物分布図

カマドの周囲およびカマドの下側まではまわりこんでいない。これは、カマドの構築される位置がこの住居の設計段階から決められていたことを示すのではなかろうか。

以下に、カマドの構造の詳細を記述してみたい。このカマドは両袖がかなり良好に残存し、煙道も不整円形の形状を明瞭に見せている。天井部は煙道の手前15cm程だけ残存していた。両袖の長さ約1m、右袖の最大幅35cm、左袖の最大幅33cmである。外形の幅107.5cm、長さ122cm、燃焼部の長さ約82cm、幅約53cm、「掘り方」から天井部の外側までの高さ約27cmを測る。「掘り方」は焚口部から45cmの部分が最も深く、煙道部に向かって緩傾斜面を形成し、煙道部で22cmの深さとなる。

支脚は完形の高杯を逆位にしたもの（第14図10）で、焚口の末端から67cmの位置にあり、主軸に対して土器半分左にズレている。「掘り方」と高杯口縁部の間には厚さ3～10cmの茶褐色土層があり、ロームブロックが含まれている。柿沼幹夫氏らが既に指摘されるように、カマドの構築時に黒色土が貼られ、その上にアーチ状の粘土塊を乗せた（増田・小久保・柿沼 1979）ことを示す。

袖部は高さ25～30cm程残存している。支脚上に乗っていた甕の器高から考えると、残存部の上端より約15cm上ぐらいいの位置を天井部の外側の高さとする高さ30～40cmのアーチ状構造をもっていたと見られる。袖の断面を見ると、最下部はロームブロックを含む茶褐色上で、その上に緑灰色粘土・灰色粘土を主体とする土を乗せている。袖の内面や芯には焼土・炭化物が多量に含まれ、カマドが長期に使用されていたことがわかる。ただし、どのように粘土を積み、つき固めるかについては、不明瞭であった。外部に暗褐色土が含まれる部分が若干あるが、それほど多くはない。煙道は壁内にあり、縦17cm、横19cmの不整円形の穴が直立する形態で壁との間隔が約8cm程である。

遺物は焚口末端から50～80cmの部分に集中しているが、ほとんどが甕（第15図27）に復元されるもので、甕が左上方から押しつぶされた時に、カマド内に散乱したようである。甕（第14図4）の破片が焚口付近にあり、高杯脚部（第14図12）が焚口末端から1mの袖付根部に包まれていた。貯蔵穴上の坏部とこの脚部は接合する。

（利根川章彦）

2 土 壤

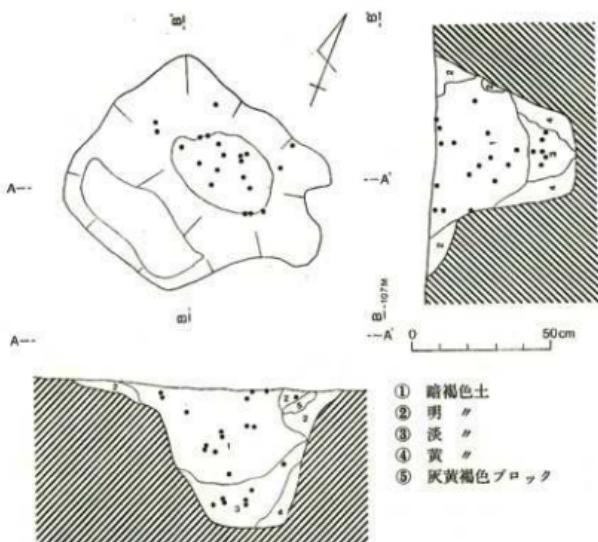
a 1号土壤（第12図）

1号土壤は、住居跡南西方向約5mの所にある。上縁部は一辺約70cmの隅丸方形に近く、底面は約40×25cmのほぼ橢円形を呈する。しかし、上縁を形作っている南半の平坦部は根による攪乱の可能性も強く、上縁部プランが約70×50cmの隅丸長方形に近くなることも考えられる。壁は擂鉢状に立ち上がり、深さは約50cmを計る。遺物は全て土師器片で、合計22点発見されている。それらは、壁の崩れと思われる黄褐色土を除き、覆土内に均等に含まれている。いずれも小破片だが、その中で2点、表面採集された遺物と接合して胸の張る變形土器に復元可能なものもある。（山下秀樹）

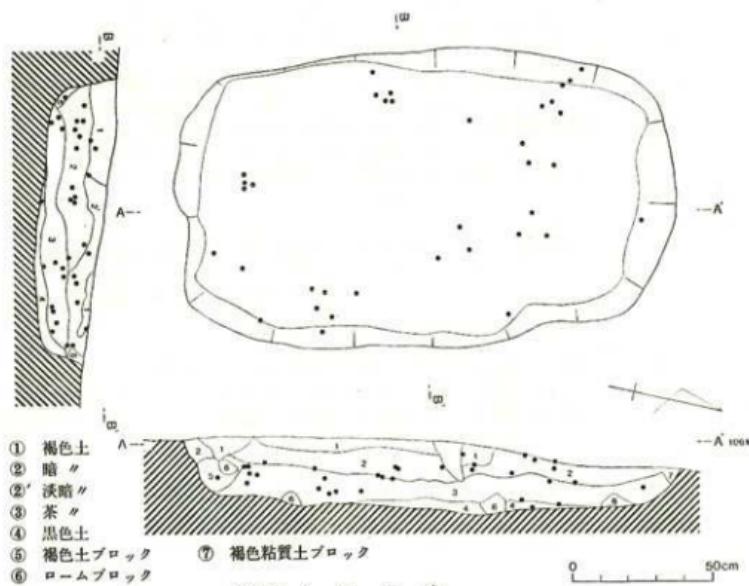
b 2号土壤（第13図）

住居跡の東方約4mの所に位置する。浅い土壤で、平面形は約180×100cmの隅丸長方形を呈し、深さは約25cmを計る。壁は急斜な立ち上がりを見せる。発見された遺物は全て土師器片で、合計38点である。いずれも小破片である。遺物の包含状態には、特徴的な傾向は認められない。

（山下秀樹）



第12図 1号 土 塗



第13図 2号 土 塗

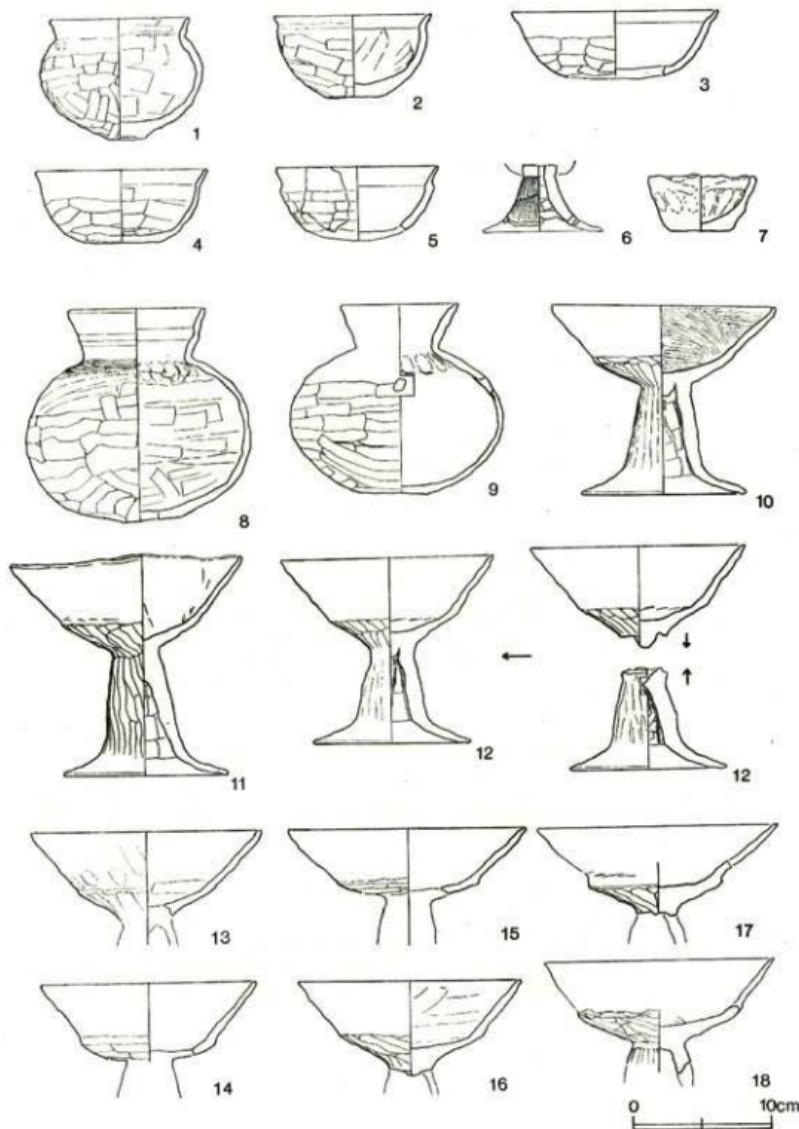
VI 遺 器

1 土 器

観察表の見方

本遺跡第1号住居跡では30個体（塊1、坏4、器台1、手捏1、壇1、龜1、高坏17、甕4）の土器が出土している。以下に観察表を示すが、各欄には、(1)器種・番号は前述の順序による。(2)大住居跡出土土器観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
塊	1	口径 10.0 胸径 11.9 器高 8.8 底径 2.6	短い口縁が外傾して立つ。頸部はゆるく「く」の字にくびれ、体部は中位に最大径をもつ。底部は指で押し上げた上げ底。整形やや丁寧。	頸部外面指圧痕。内面窓ナデ。外面部体中位横方向、下半部縱および斜め方向の窓削り。胎土細、ややザラつく。焼成良。暗赤褐色。	No. 578 貯藏穴上縁 完
坏	2	口径 11.3 器高 5.9 底径 4.2	口縁短く外反し、内面に稜もつ。端部尖り気味。器内やや厚。頸部から体部はゆるやかにつぼまり、平底の底部へ移行。整形丁寧。	体部外面横方向の窓削り。体部内斜方向の窓ナデ平滑。底面窓削り。胎土細。焼成良。赤褐色。	No. 226, 229 完
坏	3	口径(15.0) 器高(4.8)	外傾する小さな口縁やや内轉。端部は丸い。内面に稜をもつ。体部はスムーズに平底気味のやや大きな底部へ移行。整形丁寧。	体部外面上半部はナデ丁寧。下半部は横窓削り。内面ナデ丁寧。胎土細。黒く光る鉢物を多く混入。焼成良、硬。淡褐色。黒色研磨か。	No. 259, 455 全体の1/4
坏	4	口径 12.5 器高 5.3 底径 5.6	口縁やや外傾し、端部丸く仕上げる。口縁の内面にゆるい棱あり、ゆるやかにつぼまりながら、平底気味の底部へ移行。整形丁寧。形態整う。	口縁部内外面・体部外面上端横ナデ。体部横位・底部外面無方向窓削り。体部内面横位窓ナデ。底面に窓底若干あり。胎土細、ザラつく。焼成良。橙褐色。	No. 233, 449 574, 592 全体の1/4
坏	5	口径(11.6)	口縁外傾し、体部との境で内外ともに稜もつ。整形やや丁寧。	口縁部強い横ナデ。体部外面横方向窓削り。内面窓ナデ平滑。胎土細。混入品多。焼成良、硬。淡橙褐色。	No. 303 混入品か? 口縁部のみ1/8
器台	6	器高(5.3)	脚部やや開きながらゆるい曲線描いて根部へ移行。器肉厚い。天井部1個・脚下部3単位3個の円孔を焼成前穿孔する。形態整う。	台内部内窓磨き。脚部外面縦位窓磨き。内面横位窓削り。胎土細。焼成良。淡橙褐色。	No. 89 全体の1/4程か 台部端部・脚部欠
ミニチュア土器	7	口径 7.5 器高 4.0 底径 4.3	手捏。口縁歪む。口縁内轉気味で端部は丸い。体部外面は凹凸目立つ。底部は平底。	内面縦位、外側斜位の指圧痕。内外面とも指ナデ。口縁部は横ナデか。底部は周囲より粘土を寄せからナデ。胎土細、ややザラつく。焼成良。赤褐色。	No. 537 貯藏穴内

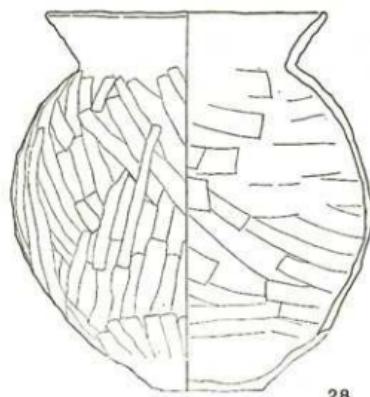
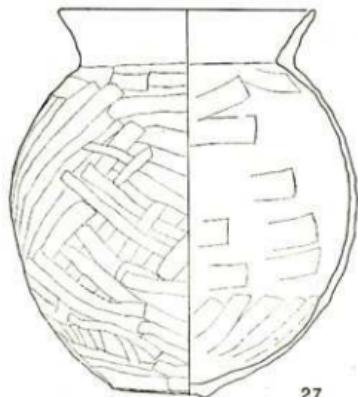
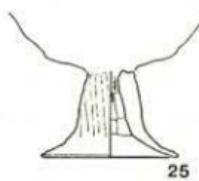
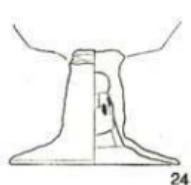
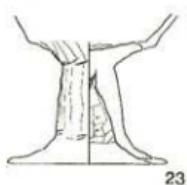
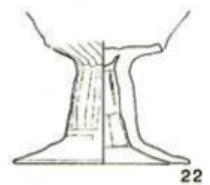
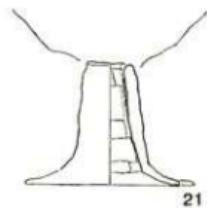
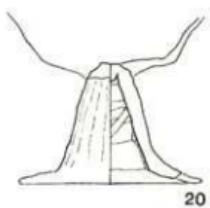
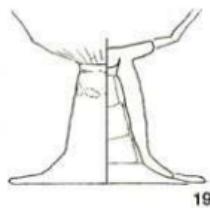


第14図 出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	8	口径 10.0 胴径 16.4 器高(15.5)	よく整った形態。口縁外傾して立ち、ゆるい段をもつ。頸部「く」の字状に屈曲。胴部は大きく張り、中位に最大径。底部は小さな平底。整形丁寧。形態整う。	頸部外面横位範磨き滑沢。胴部上位横位範ナデ、平滑。胴部中位以下横位乃至斜位の範削り。頸部内面指圧痕。胴部内面横位範ナデ。内面には接合痕残存。胎土細。焼成良、硬。橙褐色。朱彩か。	No. 452, 455 床直完
甕	9	口径 8.4 胴径 15.3 器高 13.7 底径 4.9	口縁部外傾して立つ。頸部「く」の字状に屈曲。胴部大きく張り、中位に最大径。底部は平底で、やや小さい。胴部上位に不整形の孔あり、焼成後穿孔のため内面やや広く剥落。	口縁部横ナデ。頸部横位の範ナデか。胴部横位の範削り。頸部内面指圧痕。胴部内面横位の範ナデ、やや平滑。胎土細、ややザラつく。焼成良。橙褐色	No.14, 30, 161 170~172, 174 187, 421, 446 489, 440, 700 ~705 強弱
高 壺	10	口径 16.2 器高 13.7 底径 11.9	口縁大きく開く。端部はやや内屈し、丸い。壺底部との境にゆるい稜をもつ。脚部はやや開きながらまっすぐに唇部へ移行。唇部は大きく開き、端部若干尖り気味。整形丁寧。形態整う。	壺内部内面横位の範磨き。壺底部外面斜位の範削り。稜も削り出し。脚部外縁位の範ナデ。稜不明瞭。脚部内面横位の範削り。紋目残存。壺部より出バツ状の「ホゾ」を造り出して、脚部と接合。胎土細。焼成良、硬。淡橙褐色。	カマド支脚 No.710, 221, 168 ほぼ完
高 壺	11	口径 16.7 器高 15.9 底径 11.8	口縁部・壺部の特徴⑩と同じ。ただし、端部は歪みが激しい。脚部は長く、形態的には⑨と同じ。唇部付近に明瞭な指圧部分あり。形態やや歪み、整形は丁寧。	壺部内部内面横位の範ナデ、平滑。外面縁位の範ナデ。壺底部縁位乃至斜位の範削り。脚部外縁位範ナデ、稜不明瞭、平滑。内面横位範削り。脚部～壺部連続的に巻き上げか。胎土細。焼成良、硬。淡褐色。	No.126, 130, 131, 392, 395 床直 ほぼ完
高 壺	12	口径 15.4 底径 11.3 器高 13.5	壺部直線的に大きく外傾。中位にゆるいへこみ。口縁端部は尖る。壺底部に削り出しのゆるい稜があり。壺はややふくらみ持ち、短脚傾向。脚はややふくらみ持ち、短脚傾向。唇部大きく開き、端部は尖る。形態整う。整形丁寧。	壺部口縁やや強い横ナデ。壺部内外面横位範ナデ。壺底面無方向範ナデ。壺底部外面斜位範削り。脚部外縁位範ナデ。内面横位範削り、紋目残存。唇部横ナデ。胎土細、ややザラつく。焼成良、硬。淡橙褐色。	完 脚部カマド内 壺部貯藏穴上 No.579, 792
高 壺	13	口径 16.6	口縁直線的に大きく開き、端部は丸い。壺底部の稜はゆるい。整形丁寧。形態整う。	壺部内面横位の範削り、口縁部は横ナデ。外面指圧整形後縁位の範ナデ。壺底部縁位範削り後横位範ナデ。接合部指ナデ。胎土細、やや粗粒の混入物多。焼成良。暗赤褐色。	No.267 床直カマド右 壺部のみ
高 壺	14	口径 15.8	口縁やや大きく開き、端部は丸い。壺底部の稜はゆるい。	壺部内外面とも横位の範ナデ。壺底部横位の範削り。胎土細、ややザラつく。焼成良。橙褐色。	No.575, 577 壺部口縁右

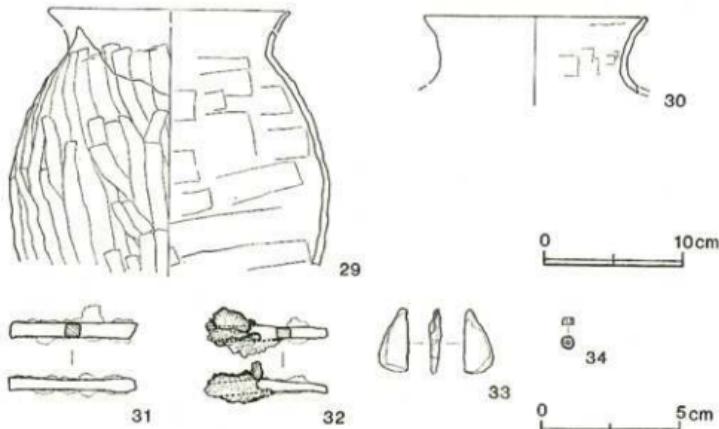
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 坯	15	口径 17.5	口縁大きく開き、やや内凹気味。端部はやや尖る。坯底部の稜はゆるい。	坯部内面横位窓ナデ、平滑。外面横位窓ナデ。坯底部横位窓削り。胎土細。焼成良。橙褐色。	No79, 219 坯部口縁1/4
高 坯	16	口径 16.0	口縁やや大きく直線的に開き、端部は尖る。坯底部の稜はゆるく削り出し。整形丁寧。形態整う。	坯部内面横位乃至斜位窓ナデ。外面窓ナデ後、指ナデか。坯部外面斜位乃至横位窓ナデ。接合部縦位窓削り。胎土やや細、ザラザラ。焼成良。橙褐色。	No97 坯部のみ
高 坯	17		口縁部大きく開く。坯底部は段をもち、その下にゆるい稜あり。	坯部内面窓ナデか？割落のため不明。外面縦位窓ナデ、窓痕残存。坯底部縦位乃至斜位窓削り。胎土やや細、ザラザラ。焼成良。橙褐色。	No483 全体の1/6
高 坯	18		坯底部にゆるい稜をもつ。脚部はややふくらみながらまっすぐ立つものか。	坯部内面窓ナデ、平滑。坯底部斜位の窓削り、かなり平滑。脚部縦位窓ナデ。脚内面横位窓ナデ。胎土細。焼成良、硬。橙褐色。	No59, 62 坯底部のみ 全体の1/12
高 坯	19	脚高(8.8)	脚部やや長く、わずかにふくらみもち、やや開き気味で裾部に移行。裾部は大きく開く。坯に付随する「ホゾ」による接合か？	坯部内面窓ナデ、平滑。窓痕残存。坯底部縦位窓削り。脚部外面指圧整形後縦位窓ナデ、上位に窓痕。内面横位窓削り。胎土細、雲母様粒子目立つ。焼成良、硬。淡褐色。	No444, 147 脚部のみ 全体の1/4
高 坯	20	脚高(7.6)	脚部開きながら裾部に移行。裾部やや大きく開き、器肉厚い。天井部残存、独立した「ホゾ」か？整形丁寧。	脚部外面縦位窓ナデ。平滑。内面横位窓削り後ナデか？胎土細、雲母様粒子目立つ。焼成良、硬。橙褐色。朱彩か？	No225 脚部のみ 全体の1/4
高 坯	21	脚高(8.4)	脚部やや長く、わずかに開き、裾部に移行。裾部大きく開く。整形丁寧。形態整う。	脚部外面縦位窓ナデ、平滑。内面横位窓削り、絞り目一部残存。胎土細、黒色光沢粒子少量。焼成良、硬。淡（橙）褐色。	No29 全体の1/4
高 坯	22	脚高(7.3) 底径 12.5	脚部やや短脚。わずかにふくらみ少し開きながら裾部へ移行。裾部は大きく開き、端部下向のつまみ出し尖る。整形丁寧。形態整う。	坯底部外面斜位窓削り。脚部外面縦位窓ナデ、下位に窓痕。内面横位窓削り、絞り目残存。胎土細、雲母様粒子多量。焼成良、硬。橙褐色。	No484 全体の1/6か
高 坯	23	脚高(6.7) 底径(12.5)	脚部やや短脚。わずかに開きながら裾部へ移行。裾部やや大きく、開く。坯に付隨する「ホゾ」接合。	坯部内面窓ナデ、平滑。坯底部外面縦位窓削り、窓痕あり。脚部外面縦位窓ナデ、窓痕あり。内面横位乃至斜位窓ナデ。天井部絞り目残存。胎土細、雲母様粒子あり。	No90 脚部2/3

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 壕	24	脚高(7.2) 底径 12.2	脚部やや短脚、わずかにふくらみ もち直立気味に裾部へ移行。裾部 内側氣味に大きく開き、端部は尖 る。整形丁寧。	焼成良、硬。赤褐色。 脚部外面縦位窓ナデ。前面天井部 横圧整形。中～下位は横位乃至斜 位の窓削り、紋り目残存。胎土細、 ザラザラ。焼成良。橙褐色。	
高 壕	25	脚高(6.0)	脚部短脚。やや開きながら裾部へ 移行。裾部は脚部から徐々に大き く開き。つまみ出しの端部で尖 る。	脚部外面縦位窓ナデ。前面横位窓 削り。紋り目残存。胎土細、ザラ ザラ。焼成良、硬。橙褐色。	No.456 全体の弱 Na.445 脚部弱 反転実測
高 壕	26		裾部ややふくらみもつ。短脚か?	坏部前面窓ナデか? 刷落して不明 坏底部外面斜位窓削り。脚部外面 縦位窓ナデ、やや平滑。前面横位 窓削り、紋り目残存。胎土細、ザ ラつく。焼成良。赤褐色。	No.363 覆土出土 1/2弱
甕	27	口径 18.6 胸径 25.1 器高 27.8 底径 6.7	分厚い口縁ゆるく外反して開き、 端部は尖り氣味。頸部は「く」の 字状に屈曲する。胸部大きく張り 中位に最大径。自然につぼまりな がら平底の底部へ移行。	口縁部横ナデ。頸部外面横位、胸 部外面斜位窓削り、やや平滑。胸 部内面上、中部横位、下部斜位窓 ナデ、平滑。胎土細。焼成良。橙 褐色。	No.563, 565, 567, 691～693 697～699, 707 ～710, 729, 750, 773, 779 781～786, 789 カマド内支脚 上 約以上
甕	28	口径 20.0 胸径 25.7 器高(27.3)	やや分厚い口縁ゆるく外反して開 き、端部は丸く、内側に肥厚。頸 部「く」の字に屈曲し、丸い頸部 へ移行。胸部大きく張り、中位に 最大径。自然につぼまりながら底 部へ移行。底部を欠く。	口縁部横ナデ。頸部～胸部外面縦 位に近い斜位窓削り。前面横位、 一部斜位窓ナデ、平滑。胎土細。 焼成良。淡橙褐色。煤ほぼ全面に 付着。	No.258, 266, 354, 386, 388 391, 400, 402 403, 468, 473 475, 476, 478 517, カマド右袖外 約
甕	29	口径(17.2) 胸径(22.9)	口縁薄く、外反氣味。頸部ゆるく 「く」の字に屈曲。胸部はやや張 り出し、中位に最大径。下半部を 欠く。	口縁部横ナデ。頸部～胸部外面縦 位窓削り、やや平滑。前面横位窓 ナデ、平滑。胎土細。焼成良。暗 赤褐色。	No.564, 566, 570, 600, 693 734, 748, 759 764, 777, 778 14程か?
甕	30	口径(15.8)	口縁薄く、やや開き、端部は丸い。 頸部はゆるく曲り、胸部へ移行。 胸部を欠く。	口縁部内面窓ナデ後横ナデか? 頸部は窓削りだが、方向不明。胎 土細。焼成良、硬。淡褐色。	No.304, 541, 口縁弱か?



0 10cm

第15圖 出 土 遺 物



第16図 出土遺物

きさは口径・底径・器高を中心に記述し、必要に応じて胴径その他を加え、残存しない部位については記述しない。(3)形態の特徴は各部位(口縁部・頸部・胴部・体部・底部・脚部・裾部)を上から順に記述し、(4)手法の特徴は各部位ごとに示し、胎土・焼成・色調も併記する。(5)備考は出土位置・取り上げ時の遺物番号・完存率を記入する。付載の遺物観察表もこれに準ずる。

(利根川章彦)

2 鉄 製 品

刀子(1)(第16図31)

現存長4.6cm、6mm×5mmの断面不整長方形。茎の部分のみで、全長も先端部の形状も不明。現存部はその中央部がやや薄く、図の右側部分に向ってやや厚くなる。貯藏穴上面出土。

刀子(2)(第16図32)

現存長4.4cm、5.5mm×4mmの断面不整長方形。(1)に比較してやや平べったい。図の左側は銹着が激しく、よくわからないが、右側の細い茎に対してやや大きい。あるいは鉢か? 床面出土。

3 石 製 品

石製横造品?(第16図33)

全長2.3cm、幅1.0cm、厚さ4mm。平坦部はあまり磨かれず、片側は斜面となる。側面は切って磨いた痕跡が明瞭である。あるいは剣形品の破片か? 色調青緑色。滑石製? カマド付近床面出土。

石製小玉(第16図34)

径4.5mm、厚さ2.5mm、孔の大きさ1mm。きれいに整形されている。穿孔は図の上方からなされたようである。滑石製。床面出土。

(利根川章彦)

VII その他の遺構

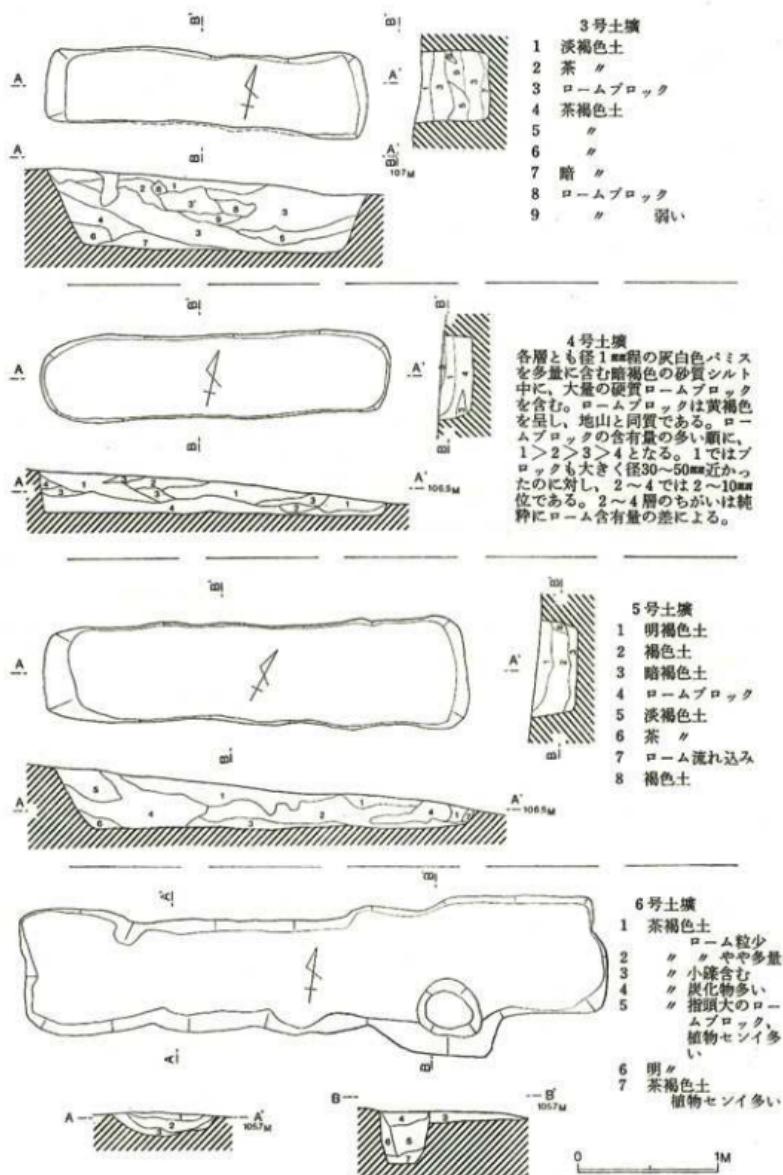
V章で記した以外には、3～6号の計4つの土壙が確認されている（第17図）。いずれもおそらく現代のものと考えられるが、その形状の差から3～5号と6号に分けて記載する。

3～5号土壙は、住居跡の南東方向約6mの所を中心によつて分布する。いずれも平面形は細長い長方形で、3号は 2.3×0.5 、4号は 2.5×0.5 、5号は 3×0.7 mを計る。深さは斜面に位置するため、3号50～40、4号30～10、5号40～10cmになる。土壙の長軸にそった側壁はほぼ鉛直に立ちあがるが、両端部の壁は急斜面となっている。いづれの側壁にも、スコップの掘り痕と思われるものが明瞭に観察される。底面はほぼ水平である。

覆土は、多量のハードロームブロックと暗褐色砂質シルトの混合したものが主体を占める。図に見る分層は、これらの土の含有比をメルクマールとしている。ロームブロックと砂質シルトがあまり調染んでおらず、このことからも土壙が埋積されてそれほど時間の経過していないことがわかる。

6号土壙は、住居跡北西約15mに位置する。掘り込みは深い所で15cm、浅い所では数cmと浅く、プランも不明瞭である。平面形は細長い長方形で約 4.2×0.8 mに達する。底面はほぼ水平である。覆土の状態は3～5号土壙と同様である。本土壙の東寄りに径約40cm、深さ約35cmのほぼ円形の掘り込みがある。覆土は6号土壙に似るが、腐植の十分進行していない植物繊維を多く含んでいる。6号土壙と本ビットとの関係は、6号土壙そのものの覆土が十分残されていないために、切合の関係が判然としない。6号土壙に伴う可能性も残しておきたい。

（山下秀樹）



第17図 3 ~ 6号土壌

VIII 自然科学分析

花粉分析及び炭化材樹種鑑定は、本集落が営まれていた当時の自然環境、特に植生と人間との関わり方を探る一助にと実施したものである。このため花粉分析用試料の採取地点は、集落が営まれた時期に最も近い堆積として、住居跡床面直上に限定した。また当時の人たちが利用した材としては、炭化材しか本遺跡では認められず、住居跡の覆土内から発見された小片のうち残りのよいものを選択して、15点を分析した。

重鉱物分析は、当地域の地史的な側面とあわせて、他地域との広範な層準対比の基礎資料として行った。現在、当地域では先土器時代にまで遡る遺跡・遺物の発見例はないが、いずれ全県レベルの地層対照図とともに、広域に先土器時代資料の発見が為される可能性もある。（山下秀樹）

1 花粉分析

(1) 試 料

花粉分析用試料は、住居跡内の床面直上からサンプリングしたもので、合計6点である。これらの試料についての試料表及び採取地点を表2と第18図に示した。

表2 花粉分析試料表

	試料番号	土質	花粉・胞子化石産出傾向※
住居跡内	A-4	暗褐色土	R
	A-5	褐色土	〃
	B-3	〃	〃
	C-3	暗褐色土	〃
	D-4	〃	C
	D-5	〃	R

※ C : Common 普通 R : Rare 少ない

(2) 結果および考察

分析結果は、検出された花粉・胞子化石総数を基準として百分率で表わし、各試料についての花粉・胞子化石の割合を算出し、表3とした。

この中で主要な花粉と胞子はダイアグラムで表わし、第19図とした。

今回の分析の結果、以下に列挙する花粉・胞子化石が検出された。

<針葉樹花粉 (AP-1)>

マツ属 (Pinus), スギ属 (Cryptomeria)。

<広葉樹花粉 (AP-2)>

クレミ属 (Juglans), クリ属 (Castanea), アカガシ亜属 (Cyclobalanopsis),
コナラ亜属 (Lepidobalanus), ケヤキ属 (Zelkova), トチノキ属 (Aesculus),
ツゲ属 (Buxus), ウコギ科 (Araliaceae)。

<草本花粉 (NAP)>

アザミ科 (Chenopodiaceae)、カラマツソウ属 (Thalictrum)、アブラナ科 (Cruciferae),
セリ科 (Umbelliferae), オミナエシ属 (Patrinia), キク亞科 (Carduoideae),
ヨモギ属 (Artemisia), タンボボ亜科 (Cichorioideae), イネ科 (Gramineae)。

<羊歯類胞子 (FS)>

ヒカゲノカズラ科 (Lycopodiaceae)、ゼンマイ科 (Osmundaceae)、ウラボシ科 (Polypodiaceae), ハナヤスリ属 (Ophioglossum), 单条溝型胞子 (Monolete spore),
三条溝型胞子 (Trilete spore)。

次に各試料について花粉・胞子構成の特長ならびに古植生について述べる。

A—4

針葉樹花粉は全く検出されなかった。

広葉樹花粉は合計で11.7%を占め、主なものとしてコナラ亜属が7.6%検出された他、トチノキ属、ウルシ属、カエデ属、グミ属が僅かに検出された。

草本花粉は非常に多く、合計で62.4%検出された。このうち約5割がヨモギ属で29.1%検出された。またイネ科が12.5%検出された他にキク亞科が5.0%、カラマツソウ属が3.3%、アブラナ科、セリ科、オミナエシ属、タンボボ亜科が、各2.5%ずつ検出された。

羊歯類胞子は合計で19.2%を占め、单条溝型胞子が11.7%、三条溝型胞子が7.5%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属を優先とし、イネ科、キク亞科、カラマツソウ属、アブラナ科、セリ科、オミナエシ属、タンボボ亜科等が生育する草地と推定される。この草地には羊歯類も良好に生育していたと考えられる。

草本の他にはコナラ亜属、トチノキ属などの広葉樹が僅かではあるが生育していたと思われる。

A—5

針葉樹花粉は合計で3.0%と少なく、マツ属、スギ属が僅かに検出された。

広葉樹花粉は合計で12.0%を占め、コナラ亜属が5.0%ツゲ属が2.0%それにアカガシ亜属、ケヤキ属、クワ科、トチノキ属、ウコギ科が僅かに検出された。

草本花粉は合計で60.0%を占め、主なものとしてヨモギ属が28.0%、イネ科が15.0%キク亞科が7.0%、セリ科が4.0%、カラマツソウ属が3.0%検出された。

羊歯類胞子は合計で35.0%を占め、多くのものが单条溝型胞子で26.0%検出された。そのほかウラボシ科、ヒカゲノカズラ科、ゼンマイ科などが若干検出された。

従って古植生はヨモギ属が優勢し、イネ科、キク亞科、セリ科、カラマツソウ属の生育する草地の植生が推定される。またウラボシ科、ヒカゲノカズラ科、ゼンマイ科等も可なり生育していると考えられる。また付近にはコナラ亜属、ツゲ属、アカガシ亜属、ケヤキ属、トチノキ属、マツ属、スギ属などの樹木が散在していたと考えられる。

B—3

針葉樹花粉はマツ属が僅かに検出されただけで少なかった。

広葉樹花粉は合計で18.0%を占め、主なものとしてコナラ亜属、トチノキ属が各5.0%検出されたほか、アカガシ亜属、ヤナギ属、ハンノキ属、クリ属、エノキ属、カエデ属、ウコギ属が若干検出された。

草本花粉は合計で46.0%を占め、半分以上がヨモギ属であった。このほかにキク亜科が7.0%、イネ科が6.0%、カラマツソウ属が3.0%、セリ科、オミナエシ属が各2.0%検出された。

羊歯類胞子は合計で30.0%であり、その多くが单条溝型胞子であった。このほかにハナヤスリ属が僅かに検出された。

従ってヨモギ属を主体とし、キク亜科、イネ科、カラマツソウ属、セリ科オミナエシ属等が生育した草地が推定される。また羊歯類も良好に生育していたと考えられる。また周囲にはコナラ亜属、トチノキ属、アカガシ亜属、マツ属等の樹木も林地を成して生育していたであろう。

C—3

針葉樹花粉はマツ属が5.0%，スギ属が2.5%検出された。

広葉樹花粉は合計で8.8%を占め、クルミ属、コナラ亜属、トチノキ属が各2.5%，アカガシ亜属が1.3%検出された。

草本花粉はヨモギ属が19.9%、イネ科が17.4%、キク亜科が11.3%、それにカラマツソウ属が3.8%検出された。

羊歯類胞子は合計で20.0%を占め、单条溝型胞子が7.5%、ウラボシ科が7.4%、ヒカゲノカズラ科が2.5%、それにハナヤスリ属、三条溝型胞子が各1.3%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属、イネ科、キク亜科を優勢とする草地と考えられる。この草地にはウラボシ科、ヒカゲノカズラ科等の羊歯類も良好に生育していたと推定される。

D—4

針葉樹花粉はスギ属が1.0%検出されただけで少なかった。

広葉樹花粉は合計で17.5%を占め、主なものとしてコナラ亜属が5.0%、ケヤキ属が3.0%、クリ属、アカガシ亜属が各2.0%検出されたほか、エノキ属、トチノキ属、ツゲ属が僅かに検出された。

草本花粉は合計で52.0%を占め、主なものとしてヨモギ属が22.0%、イネ科が18.0%、キク亜科が3.5%、アザ科が3.0%検出された。このほかタンボボ亜科、アブラナ科、セリ科などが僅かに検出された。

羊歯類胞子は合計で20.5%を占め、主るものとして单条溝型胞子が12.5%、ウラボシ科が3.5%、三条溝型胞子が3.0%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属、イネ科を優勢とし、キク亜科、アザ科などの生育した草地が推定される。また羊歯類も良好に生育していたであろう。樹木としてはコナラ亜属、ケヤキ属、ク

リ属、アカガシ亜属が草地の周辺に生育していたと思われる。

D—5

針葉樹花粉はモミ属が僅かに検出されただけで少なかった。

広葉樹花粉はコナラ亜属が4.0%検出されたほか、クリ属、ケヤキ属が僅かに検出された。

草本花粉は合計で64.0%を占め非常に多かった。このうち約5割はヨモギ属で31.0%検出された。またイネ科が17.0%と高率であった。このほかキク亞科が8.0%、アカザ科が3.0%、セリ科が2.0%、それにガマ属が僅かではあるが検出された。

羊歯類胞子は合計で25.0%であり、單条満型胞子が17.0%、三条満型胞子が5.0%、それにゼンマイ科、ウラボシ科が僅かに検出された。

従って、ヨモギ属、イネ科を主体とし、アカザ科、セリ科等の生育する草地が存在したと考えられる。また羊歯類も多く生育していたと推定される。樹木としては前述のコナラ亜属などが若干生育していたと考えられる。

その他の微化石として、淡水生の藻類と考えられる *Pseudoschizaea* が検出された。このことはガマ属の検出と相俟って水の影響が考えられる。

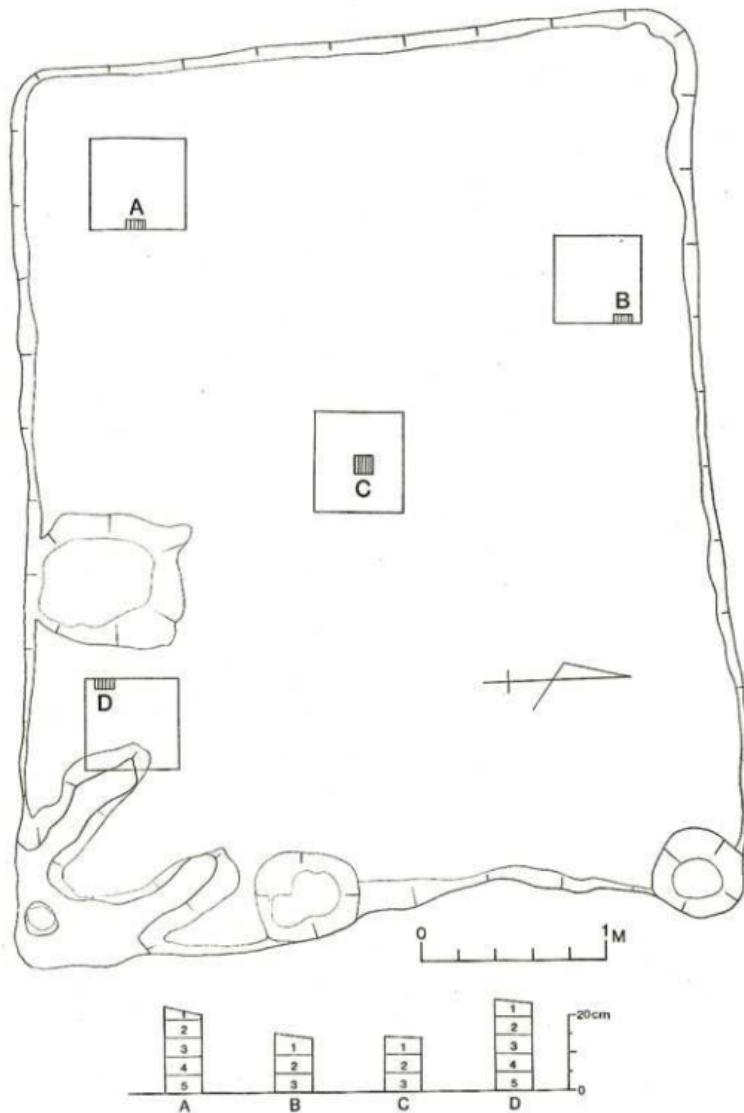
(3) まとめ

以上、各試料についての花粉構成を述べてきたが、6試料ともに良く似た花粉構成を示していると云える。よって古植生も殆ど同じであり、ヨモギ属を主体とし、次いでイネ科、キク亞科を主な構成要因とする草地の存在が推定された。

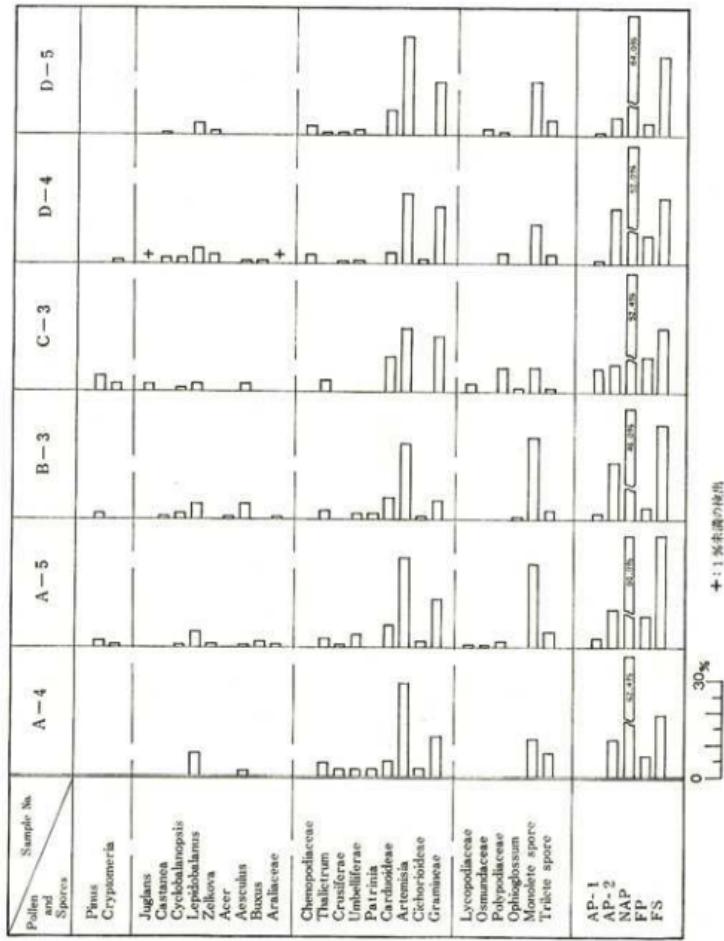
一方、樹木類はあまり多くはなく、コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹類が草地の周囲に生育する単純な林地が存在したと考えられる。そして、A—5、B—3、C—3、D—4に見られるようなマツ属やスギ属は、現在と較べて非常に少なかったと思われる。

(徳永重元)

PALYNOSURVEY CO., Ltd.		DATE : 1960. 08. 19		NOTE : %	
		DETERMINATION BY :			
		S. TOKUNAGA H. OISHIMA Y. ITO M. KASAI			
Pollen and Spores	Sample No.	✓	✓	✓	✓
Abies		2.0	2.0	5.0	1.0
Firns		1.5	2.5	1.0	
Cyprioneria		0	3	6	2
Σ AP-1	(%)	(%)	2.0	7.5	1.0
Juglans				2.5	0.5
Salix			1.0		
Alnus			1.0	2.0	1.0
Castanea			1.0	2.0	
Cyclobalanopsis			1.0	1.3	2.0
Lepidobalanus			7.6	5.0	2.5
Oleis				1.0	1.0
Ulmus				0.5	
Zelkova			1.0		3.0
Moraceae			1.0		1.4
Sapindus			0.8		0.5
Rhus					
Acer		0.8	1.0		
Aesculus		1.7	1.0	2.5	1.0
Buxus		2.0			1.0
Betagrus		0.8			
Araliaceae			1.0	1.0	0.5
Tilia				0.5	
Σ AP-2	(%)	(%)	14	12	18
			11.7	12.0	8.8
			18.0	17.5	6.0
Σ AP	(%)	(%)	14	15	20
			13	37	7
			11.7	15.0	16.3
			20.0	18.5	7.0
Chenopodiaceae				3.0	3.0
Thalictrum			3.3	3.0	3.8
Cruciferae			2.5	1.0	1.0
Umbelliferae			2.5	4.0	2.0
Patrinia			2.5	2.0	1.0
Carduoideae			5.0	7.0	3.5
Artemisia			29.1	28.0	19.9
Cichorioideae			2.5	2.0	1.5
Infidaceae			12.5	15.0	17.4
Craniaceae			6.0	18.0	7.0
Typha					1.0
Leguminosae			1.7		0.5
Rubiaceae			0.8		
Plantago				1.0	
Nymphaeidae				0.5	
Σ NAP	(%)	(%)	75	60	46
			62.4	65.0	48.0
			52.4	52.0	64.0
Muciloplate pollen					
Tricolporate pollen			4.2	1.0	1.3
Triporate pollen			2.5	9.0	10.0
Σ PP	(%)	(%)	8	10	9
			6.7	16.0	4.0
			11.3	9.0	4.0
Lycopodiaceae			1.0	2.5	
Osmundaceae			1.0		2.0
Polypodiaceae			2.0	7.4	3.5
Ophioglossum			1.0	1.3	1.5
Pteris			11.7	26.0	7.5
Monolete spore			7.5	5.0	3.0
Triporate spore					5.0
Σ FB	(%)	(%)	23	35	30
			19.2	35.0	30.0
			20.0	20.5	25.0
Σ POLLEN & SPORES	(%)	(%)	120	100	80
			200	100	100
Pseudoschizaea					



第18図 分析用土壤サンプル採取位置図



第19図 主要花粉・胞子化石ダイアグラム

2 炭化材樹種鑑定

(1) 試 料

児玉農工高校遺跡より出土した炭化材計15点について樹種の鑑定を行った。

標本は何れも極めて小さく、大きいものでも直径1cmぐらい、小さなものは径5mmを割っている。このため樹種の鑑定は困難を極め、カシ類やクヌギなど、材に顕著な特徴のある樹種以外は全く識別が出来なかった。

方法は試料が小さいため、電子顕微鏡の樹脂で包埋して切片を得るか、または岩石プレパラートの薄片方法に似た方法により切片を得て、観察を光学顕微鏡で行った。

鑑定結果の一覧を表4に、切片の写真を図版18~25に示し、以下に樹種別に簡単な記載を行った。

(2) 鑑 定 結 果

(1) クヌギ *Quercus acutissima* Corr ブナ科

(標本) (5), (6), (7) 以上3点

年輪の始めに大道管が1列に並び、脱材部に中径の円形の道管があり、複合放射組織をもつことから、ブナ科コナラ属のクヌギ、またはアベマキであることが判る。クヌギは広く全国の暖帯、温帯に分布し、関東地方では最もボビュラーな樹木の一つであるが、アベマキは現在の分布は東海地方以西に限られていることから、本炭化材はクヌギであると考えられる。

クヌギは樹高15m・幹径40cmぐらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で割裂しやすく、器具(柄物など)、杭、薪炭などに用いられる。

(2) カシ類一種 *Quercus* sp (*Cyclobalanopsis* sp) ブナ科

(標本) (2), (8), (9), (10), (11) 以上5点

比較的大型の道管が放射方向に配列し、複合放射組織を持つことからブナ科コナラ属のアカガシ亜属 (*Cyclobalanopsis*)、いわゆるカシ類の一種であることが判る。現在の関東地方にはシラカシ、アカガシ、アラカシなどが分布しているが、本炭化材が何れの種であるか、また5標本とも同一種であるかは、カシ類の材構造が互いによく似ているため判らない。

カシ類は照葉樹林の主要構成メンバーで、主に東北地方以南に分布している。材は堅く強靭で水湿に強いが、加工は容易でない。建築、器具、車輛、船舶、機械材など広い用途がある。

(3) 広葉樹材 枝

(標本) (4), (14), (15) (枝材) 以上3点

何れも広葉樹類の細枝の材と思われ、何れも枝が伸長した年の分の材か、あるいは2年目の材が僅かしか無いため、その樹種本来の道管の配列など、識別根拠となる形態を全く示していない。したがって樹種の同定は勿論のこと、この3標本が同一種または異なる種を含んでいるかについても判断をしかねる。

(4) 広葉樹 根材

(標本) ①、⑬、③ 以上3点

中心に pith が無く、通常組織がうみており、道管が散在していることから、広葉樹の根材であることが判るが、上述の枝材同様に極めて若い部分であるため識別は困難である。ただ標本①は、放射組織が単列で穿孔が单一であることからクリの、また⑬には複合放射組織らしきものを見る事からコナラ属の、それぞれ可能性が考えられる。

(5) 単子葉

(標本) ⑬ 1点

円形の外形をもち、中に梢円形の維管束が散在していることから、単子葉類の茎であると考えられる。また茎の中央が中空になつてないことから、ススキなどのイネ科のものとも考えられるが、情報が不十分なため確認は出来ない。

(鑑定者 東京大学農学部森林植物学教室 鈴木三男)

表4 炭化材樹種鑑定結果一覧表

以上の花粉分析と炭化材樹種鑑定結果を見ると、いくつかの点に気がつく。第一には、若干のアカガシ亞属を含むコナラ亞属を主体とする落葉広葉樹林が遺跡の周囲に占地していたとする花粉分析結果と、炭化材の樹種がよく一致している点である。カシ類とクスギの量比が逆転しているが、試料数が限定されている本例においては大きな問題とはならない。両者の分析結果の符合は当然ではあるが、やはり有力な傍証となろう。

第二は炭化物中に根材の含まれている点である。資料15点は採集された100点以上の炭化材から、形態、硬さなどを基準に我々が選択したものである。そのわずか15

点の中に3点もの根材が含まれていたということは、これらも薪炭として利用していたと解すべきであろうか。

第三は、花粉分析の結果、ヨモギ属、イネ科、キク亞科などを主体とする草地が本遺跡の周囲に広がっていたという点である。樹木類の構成種を無視するならば、ヨモギ属、イネ科、キク亞科な

標本番号	樹種	出土地點
①	広葉樹(クリ?)根	BブロックNo3 20~25cm
②	カシ類一種	〃
③	広葉樹根	〃
④	広葉樹枝	〃
⑤	クスギ	DブロックNo4 20~25cm
⑥	〃	〃
⑦	〃	〃
⑧	カシ類一種	〃
⑨	〃	AブロックNo4 20~25cm
⑩	〃	〃
⑪	〃	〃
⑫	単子葉	BブロックNo4 25~30cm
⑬	広葉樹(コナラ属?)根	〃
⑭	広葉樹枝	〃
⑮	〃 枝	〃

どの卓越する植生は、古くは2万年以前から武藏野台地・大宮台地では断続的に出現しているのである。また東北新幹線上尾一号遺跡の、古墳時代初頭（五領期）の住居跡の分析結果でも同様の結果が得られている（未発表）。先土器時代の寒冷気候から、ほぼ現在と同じ気候に至るまで、草木類の繁茂に類似した傾向が現われるのは、火山灰地たる関東地方の特色なのであろうか。人間の自然に対する圧力が、先土器時代と古墳時代では格段に差があったであろうことを想像するならば、何等かの自然的要因を考慮に入れて分析結果に対処する必要があろう。

(山下秀樹)

3 重鉱物分析

(1) 試 料

重鉱物分析試料は、深掘りグリッドに露出するセクションの3～4層にわたって採取した（第20図）。両層ともローム層で、約60cmの間を5cmきざみに採取したため合計12試料になる。（山下秀樹）

(2) 分析法

水分を含有した試料を超音波発生装置にかけ、傾斜法にて粘土分を除去した。用いた試料の乾燥重量を求めるため、恒温乾燥器内に105°Cで5時間放置したのち水分を測定した。

粘土分を除去した試料を乾燥後、 $\frac{1}{4}$ mm（65メッシュ）と $\frac{1}{16}$ mm（120メッシュ）の篩を用いての $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{16}$ mm粒度の砂分だけを抽出した。

上記の砂分を秤量後、テトラブロムエタン（比重 ≈ 2.96 ）を重液に用いて重鉱物を分離した。テトラブロムエタン中に沈んだ重鉱物を秤量ののちプレバラートを作成した。

偏光顕微鏡下にて重鉱物を300個体程度観察し、それぞれの鉱物の比重を考慮して重量比による鉱物組成を算出した。

(3) 分析結果

分析結果は表5に示した。これを基に図21を作成し、21-1図には重鉱物量の変化、21-2図には各鉱物の産出変化、20-3図には重鉱物組成をそれぞれ図示した。

(1) 色調

今回の試料の色調は、野外での層序区分とはほぼ一致している。

No.1は褐色であり、No.2～7は黄褐色、またNo.8～12は暗褐色である。

全試料における粘性は弱いものであった。

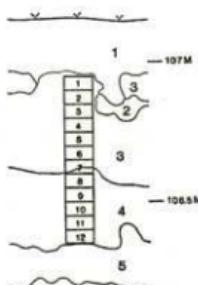
(2) 砂分量

試料中に占める $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{16}$ mmの砂分の量は約10%前後である。

No.12の8.1%から増加し、No.8の11.4%をピークに減少し、No.2、No.1では、ほんの少し増加する傾向にある。

(3) 重鉱物量

$\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{16}$ mmの粒度の砂分中における重鉱物量の変化は、なだらかな曲線を画いて推移する。



第20図 重鉱物分析用土壤サンプル採取位置図

No.12は54.3%であり、No.11にかけてやや減少が見られるものの、No.11の51.0%からNo.6の65.0%にかけて単調に増加する。

No.6をピークにして上位に向って重鉱物量は単調に減少し、No.1では43.0%である。

(4) 各鉱物の垂直的産出変化

カンラン石

No.12～7において自形～半自形のカンラン石が1%前後みられる。

No.6～5にかけてカンラン石は産出せず、No.4で0.8%、No.2で0.3%と微量ながら断続的に検出された。No.4およびNo.2で見られたカンラン石は、半自形～他形の形態である。

斜方輝石

全試料を通じて最も普通にみられる斜方輝石は、垂直的な産出の変化があまり顕著でなく、一定した産出を示す。

No.12において斜方輝石の産出の最大値の70.4%を示す。

No.11～9は56～58%の産出を示し、殆ど変化が見られない。No.9に較べてやや減少し、No.8は53.8%を示すが、No.7は59.4%に増加している。

No.10では再び53.0%に減少するが、上位に向って漸増し、No.2で60.2%に達する。

No.1は55.1%と、No.2に比較してやや減少する。

No.12～1の全試料において柱状を示す自形の斜方輝石が観察される。

单斜輝石

No.12は17.3%である。

No.11(23.3%)からNo.9(19.8%)にかけて漸減する。

No.6からNo.1においては、No.5とNo.3をそれぞれ極大とする増減を示す。

全試料を通じ柱状の自形～半自形を示す单斜輝石が観察される。

角閃石

今回の試料中には角閃石はあまり検出されず、上部の一部と下部に限られた。

下部ではNo.12～10およびNo.8において少量の角閃石がみられる。No.11(1.8%)およびNo.10(1.7%)では自形～半自形を示す角閃石も観察される。

上部のNo.1では他形の角閃石が0.5%産出する。

不透明鉱物

No.12からNo.9にかけて不透明鉱物は11.4%から20.7%に漸増する。

No.8～7では20%前後で殆ど増減なく推移する。

No.6において28.2%のピークを形成し、No.5からNo.2の間に緩やかに減少し、No.2では17.4%となる。

No.1において不透明鉱物が突然30.0%と増加する。

(4) 考 察

上に述べたような重鉱物分析の結果が出たが、それに関して若干の考察を以下に述べる。

本地域においては、斜方輝石・单斜輝石・不透明鉱物が主として産出している。斜方輝石が最も

多産することも大きな特長である。

北関東には、浅間山・榛名山・赤城山等の火山が分布するが地理的に考えて、本地域に火山灰などをもたらす可能性があるものとして浅間山・榛名山があげられる。

浅間山の火山灰は斜方輝石に富み、单斜輝石・不透明鉱物などの重鉱物から成る。北関東の上部ローム層を形成している火山灰は、殆ど浅間山起源と考えられている。また歴史時代においても数回の活動がみられる。

榛名山起源の火山灰は重鉱物組成において角閃石の産出が特長的である。榛名山起源の火山灰は、有史以後の二ツ岳火山灰を除くと中部ローム層や下部ローム層にみられる。

以上のことから、今回の試料は浅間山起源のものと思われる。

また今回の試料は褐色～茶褐色のロームであった。

これらの試料を採取したロームの上位には、黒褐色土が重なるとされており、この黒褐色土は表土と考えられる。

故に、浅間山起源の重鉱物組成をもち、表土と区別される褐色～黄褐色の風成火山碎屑物である本試料は、北関東地域の上部ローム層に相当するものと考える。

これは関東ローム研究グループ(1965)の地質図において、本地域が、上部ローム層以上が分布するとされていることと矛盾しない。

次に各重鉱物の垂直的な産出変化に注目して、便宜的に地層をⅠ～Ⅴに区分して考えてみたい。

区分は下位よりⅤ(№12)、Ⅳ(№11～№9)、Ⅲ(№8～№7)、Ⅱ(№6～№2)、Ⅰ(№1)の5区分とする。

Ⅴは、斜方輝石が多いこと、单斜輝石・不透明鉱物が少ないと、産出変化がⅣに滑らかに連続しないこと、からⅣと区別した。

Ⅳは、斜方輝石の変化が殆どなく、单斜輝石は上位に向って漸減、不透明鉱物は漸増する傾向が特長である。

Ⅲの特長は、不透明鉱物が殆ど変化ないこと、斜方輝石が上に向って増加すること、单斜輝石が減少すること、である。

Ⅱは、斜方輝石が上に向って漸増し、不透明鉱物が漸減する。

Ⅰは、不透明鉱物が多産し、産出がⅡと連続しないことから、Ⅱと区別される。

以上のようなそれぞれの区分内では、各鉱物の変化の傾向が同様である。本地域の周辺において連続した地質断面で、このような重鉱物分析を行った例は殆ど見られない。

従って以上のように得られた変化傾向を基準にして、本地域の地層を他地域の地層と対比することは今のところ出来ない状況にある。しかし今後データの集積が重なれば、北西関東地域も広域的な対比ができる可能性が少くないと考える。

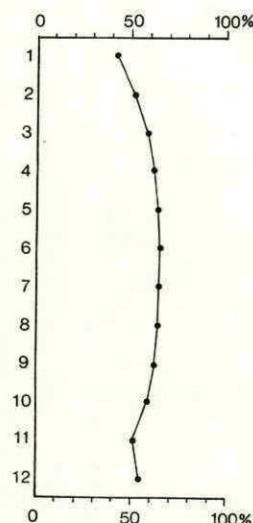
(河西 学)

TITLE : 表5 重鉱物分析結果一覧表										
DATE : 1980. 12. 8					NOTE : 色調は新版標準土色帖(日本色彩研究所発行)による。					
ANALYZED BY : 河西 学										
層位	試料番号	色調	試料の砂分量 中1/4 1/4 1/4 1/4 W % %	1/4中の 重鉱物の 砂分量 W % %	斜方輝石	單斜輝石	カンラン石	角閃石	不透明鉱物	その他
③	1	褐 10YR 4/6	9.7	43.0	55.1	14.4		0.5	30.0	
	2	黄褐 10YR 5/6	9.4	52.0	60.2	21.2	0.3		17.4	0.9
	3	黄褐 10YR 5/6	8.9	58.7	58.2	22.9			18.9	
	4	黄褐 10YR 5/6	9.0	62.2	59.1	19.4	0.8		20.5	0.2
	5	黄褐 10YR 5/6	10.2	64.1	56.7	21.8			21.5	
	6	黄褐 10YR 5/6	10.9	65.0	53.0	18.8			28.2	
	7	黄褐 10YR 5/6	10.9	64.3	59.4	19.7	0.3		20.6	
	8	褐 10YR 4/6	11.4	63.9	53.8	25.1	1.2	0.3	19.0	0.6
	9	褐 10YR 4/6	10.9	62.6	58.2	19.8	0.6		20.9	0.5
④	10	褐 10YR 4/6	9.7	58.5	56.4	20.8	0.8	1.7	19.8	0.5
	11	褐 10YR 4/6	7.1	51.0	57.2	23.3	0.9	1.8	16.5	0.3
	12	褐 10YR 4/6	8.1	54.3	70.4	17.3	0.3	0.6	11.4	

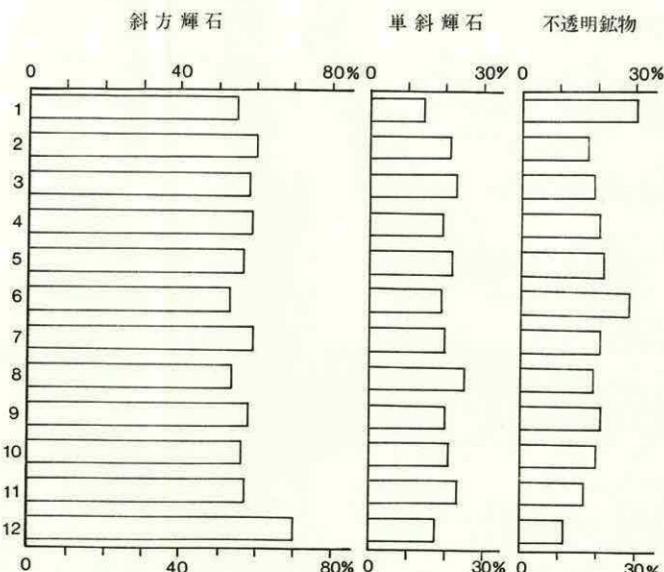
重鉱物分析結果

21-1図 $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{8}$ mm

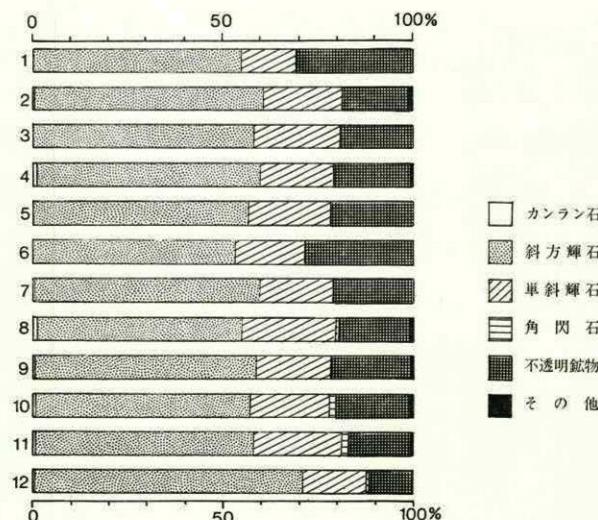
砂分中の重鉱物量変化図 土層



21-2図 主要鉱物の産出変化図



21-3図 重鉱物組成図



第21図 重鉱物分析結果

X 考 察

i) 倉林後遺跡とその周辺出土土器の編年

本報告においては、前述のように①倉林後遺跡住居跡出土土器30個体を紹介し、さらに後述する②倉林英夫氏が倉林地内の烟地を耕作中に取り上げた土器群より7個体、③故小沢国平氏の調査による金屋池脇遺跡の方形周溝墓出土土器4個体を紹介した。①は従来の編年觀における和泉I式、②は鬼高I～II式、③は五領（石田川）式の後半期にあたるものである。ここでは、これらの資料を個別に検討し、付随するいくつかの問題も考えてみたい。

まず①である。児玉地方周辺において和泉式土器を出土する遺跡は上里町愛后遺跡（駒宮・大和 1976）・本庄市東谷遺跡（小久保・柿沼 1978）・古川端遺跡（同前）・後張遺跡（増田・宮崎 1977）・諏訪遺跡（増田・小久保・柿沼 1979）・西富田新田遺跡（菅谷 1972）・二木松遺跡（水島・柴崎・長谷川 1976）・東五十子城跡遺跡（同前）・美里村桶之口遺跡（菅谷 1976）・前畠遺跡・東山遺跡（増田・宮崎・駒宮 1980）・北貝戸遺跡（菅谷・坂本 1977）・児玉町枇杷橋遺跡（菅谷・駒宮 1974）・神川村畠中遺跡（谷井・宮崎 1980）・岡部町東光寺裏遺跡（中島・稻生 1980）・六反田遺跡などである。この中で愛后遺跡1・3号住居跡（以下X号住と省略する）は窯底部外面に舌状の突帯をもつ高窯や刷毛目整形を多用する甕を出土し、枇杷橋遺跡7号住は台付甕を伴なうなど古い様相をもつ。下田遺跡25号住（増田・小久保・柿沼 1979）・雷電下遺跡25号住（増田・駒宮 1979）のように小型化したS字状口縁台付甕が壺形土器の主体となる資料に後続するものである。これに統いて古川端遺跡8号住のような「く」の字状の長い口縁部を有する壺をもち、S字状口縁台付甕が衰退するセットの一組がある。愛后遺跡7号住にもこれに類似する壺形土器があるが、小型壺形土器を多量にもつこと、目の粗い鋤目による調整がなされて、胴下半の膨らむ壺形土器を含むなど、古式の様相が目立つ。愛后遺跡全体の中では、13号住が最も新しく、腹や平底の塊をもつ。古川端8号住にも腹が伴い、壺・甕の形態が愛后7・13住と共通する部分が多い。

これらの現象を時間差によるものと考えるならば、愛后1・3号→愛后7号→愛后13号・古川端8号という時間的序列を想定できる。従来の土器型式論を考慮するならば、前二者は和泉I式に該当する。本遺跡1号住のセットはこれらに直結する一群であろう。愛后13号住・古川端8号住の高窯は愛后遺跡の古い一群と異なり、脚窓部が大きく開く傾向があるが、本遺跡の例も脚窓部は大きく開き、端部のつまみ出しがやや顕著なものを含む。また、i) 塵は大型のものしかなく、塵と同じ整形になる焼成後穿孔の塵を有する。ii) 口縁が小さく「く」の字に外反する平底の塊が伴出する。iii) 壺は胴が大きく張り、長い口縁部が大きく開き、「く」の字状の頸部をもち、重複の目立つ細かな継ぎ箇所で外面調整をされる、という様相から判断するに、本遺跡の一群は古川端8号住・愛后13号住段階に並ぶか、後出する。この2軒の住居跡にはいずれもカマドが付設されていないため時間的に古いと考えれば、本遺跡はカマドの付設の（埼玉における）最も古い時期の範疇で把握せねばならない。

カマドが導入された時期を土器の様相から探ることは不可能ではないと思う。しかし、畠中遺跡・古川端遺跡・東谷遺跡・諫訪遺跡などカマドを有する武藏北部最古の遺跡群が、新幹線や灌漑用水路などの開発に伴う幅の狭い調査区しか与えられなかつた発掘調査にしかかかっていないため、まだ各集落跡の全貌をつかみきれていない状態にある。したがつて個別の住居跡出土の土器の様相から考へている現状では、「カマドの導入」なる歴史的・文化的に価値のある現象を論じるには危険性があるが、敢えて言うならば、本遺跡の一群・古川端遺跡22号住・諫訪遺跡32号住・畠中遺跡2号住などが、武藏北部にカマドの導入された時期を示す。これら的一群に、須恵器がまったく伴わないことから、北武藏に須恵器が搬入され始めるTK216乃至TK208型式（児玉町教育委員会の鈴木徳雄氏のご教示によれば、児玉町ミカド遺跡の鬼高I式前半の住居跡に伴なう古式須恵器で明らかに搬入品と考えられるものはTK216～TK208型式だという）と同時期かそれ以前ということになり、陶邑古窯址群の発掘調査に伴う年代測定（井藤 1979）を妥当なものとするならば、450～470年を中心とする時期、すなわち5世紀第3四半期の中で考へてよいのではなかろうか。

須恵器を模倣した壺形土器を伴う一群に先行するものとしては、この時期の後にも、東谷遺跡25号住・西富田新田遺跡7号住・二本松遺跡6号住・諫訪遺跡49号住・東五十子遺跡8号住などの一群がある。この一群は九底化しつつある壺形土器・短脚化傾向の高杯・長胴化傾向の壺形土器を主体とするセットをなし、須恵器の影響と考えられている「有段口縁」の壺形土器を伴つたり、諫訪49号住のように伽耶系土器の有蓋高杯を彷彿とさせる蓋形土器を伴うものすらある。諫訪49号住の須恵器無蓋高杯が、陶邑のTK208～47型式に相当すると考えられている（増田・小久保・柿沼 1979）ため、これらを5世紀第3～4四半期に當てられる。この一群を鬼高I式の最古の一群と考える立場もあるが、須恵器模倣杯の成立はもう一段階遅れるため、当地の鬼高式土器（ただし文化としての鬼高式土器であり、時代の変化としての、換言すれば後期古墳時代社会への転換点としての「鬼高峰期」とは必ずしも同値になるとは思えない）の成立をかなり狭い範囲、たとえば、岡部町や深谷市的一部分を含む児玉郡地域の中で、他と厳密に區別する必要がある。私見では、鬼高式土器の要素の出現は、児玉においてはやや早く認められ、下総地方との共通性の大きい北足立地方や八王子周辺の土器の影響を6世紀中葉前後から顯著に認められる比企地方とは土器の変化のあり方の總体が異なる。そこで、少なくとも、上毛野・児玉地域、比企一入間一多摩地域、北足立一下総西部地域については独立した鬼高式土器の編年（細分）論が必要となつてきていると思うが、本稿ではそれを取り扱うことを目的としていないし、紙数も余裕がないので、機會を改めたい。

次に、(2)である。この土器群は一時期の所産とは考えられない。胸部の大きく張る甕（付載第3図1）は古く、それ以外はほぼ同時期と考えてよいであろう。胸部の大きく張る甕は最も古く考へれば、①の検討において抽出した古川端8号住の段階、最も新しくとれば、下田遺跡24号住（小久保・柿沼 1979）（私見では、諫訪49号住→諫訪46号住→下田24号住という土器の変遷を考えるので、49号住より2段階新しくなる）の段階となり、5世紀第3四半期～6世紀第1四半期の中で考へられるが、胎土・焼成・整形の特徴から見て、本遺跡1号住とは大きな隔たりのない時期に當てられると思う。

さて、それ以外の土器であるが、壺2個体、甕4個体のこの一群は從来の鬼高I式土器の範疇に

含まれる。この時期の土器を出土する遺跡は、本遺跡の近傍では、頸蓮神社前遺跡（中村・磯崎 1980）、精神場遺跡（梅沢・高橋・中村 1978）、原遺跡（梅沢・高橋・石岡 1978）、中道・西北原遺跡（駒宮 1974）、宇佐久保遺跡（中村 1978）があり、本庄市市街地周辺に、東谷遺跡、下田遺跡、薬師遺跡（水島・柴崎・長谷川 1976）などがある。この中で最古の土器群は、原遺跡5号住で、当地の鬼高Ⅰ式土器の特徴の一つである口縁部の外傾する杯のみをもち、内傾する杯を有しない。甕は「く」の字状の口縁部・軽い段を有する肩部をもち、胴部中位が最大径となるが、かなり細長い胴部形態を呈するものが多い。ただしこの住居跡の一群は古い形態の塊形土器を伴い、6世紀の後半代に下ることは確実視できない。

これらに後続して、外傾する口縁部に段を有する杯と口縁部が内傾し、体部との境に浅い沈線を有する杯が出揃う一群がある。下田43号住・東谷12号住・14号住・21号住・原12号住などがこれにあたる。東谷遺跡の資料は土器の個体数が少ないが、21号→14号→12号の変化がたどれる（小久保・柿沼 1978）。21号住には外傾する杯がないが、大型瓶や高杯などを失っているので不確定であるが、14号住段階をもって初めて「外傾する口縁部に段をもつ杯（外傾複數段杯）」が出現するすれば、下田43号住はこれに並行するであろう。12号住の外傾複數段杯には扁平化の傾向が見られ、原12号住はこれに並行乃至後出する。これらの段階を通じて、甕の形態にはそれほど大きな変化が認められないが、胴部の張る形態のものは、21号が胴部タテヘラケズリ、12号は胴部上位ヨコヘラケズリで、12号が明らかに後出である。また、普通の長甕も21号や下田43号では口縁部を「く」の字に近く整形するが、12号や原12号では、あまり「く」の字の整形が意識されなくなり、大きく外反させてつまみ出す形態に変わってくる。

本遺跡の資料は下田43号住のものよりはやや扁平な感じで整形される杯形土器と完全に口縁部がつまみ出されて外反する甕形土器なので、下田43号住・東谷14号住～原12号住の間で考えられるもので、一軒の住居跡の一括資料と考えることも不可能でないが、甕は宇佐久保遺跡8号住などのさらに後出する一群と共通する要素もあるので、杯は6世紀後半の半ばを前後する時期、甕は6世紀後半のやや新しい段階から7世紀初頭の中で考えれば大過ないであろう。いずれにせよ、6世紀後半代の良好な一括資料がまだ少ないので、上里町北畠塚遺跡（上里町教育委員会調査）、本庄市石神境遺跡（本庄市教育委員会調査）の資料が公表された時点で再検討してみたい。

最後に③である。金屋池脇遺跡の方形周溝墓からはかなり多數の土器が出土したようで、小沢氏の報文（『埼玉考古』第7号）にも9個体の土器の実測図が公表されている。本報告の4個体は、小沢氏報文の実測図と対照すると、それに含まれないものがない。そこで、ここではこの4個体を同一遺構のセットの一部と理解した上で検討してみよう。

③の資料は壺・小型壺・鉢・塊各1の4点である。壺は最大径を口縁部に持たず、体部の張りが大きく、上げ底の底部である。小型壺形土器の系譜にあるものと思われるが、口縁部が短く、形態的にはやや新しい段階の土器であろう。やや異なるが、下田遺跡5号住には平底・丸底の小型壺形土器が存在し、諏訪遺跡19号・50号方形周溝墓にも体部の発達したものや平底・上げ底のものが存在する。

また、50号墓には口縁部が長く、外反する小型壺があり、19号墓にも胴部全面に刷毛目を施し、

部分的にナデ消される小型壺がある。これらは、整形や調整のあり方から見て、③の小型壺・鉢などとあまり隔たりのない時期の所産であり、19・50号墓に対して、③はやや後出的である。

諏訪遺跡の方形周溝墓は4基中3基が輪軸方向をほぼ等しくとつていて、短期間のうちに形成されたと考えられる。これらを五領期後半でもやや新しい段階と考えたい。他に五領期末葉と考えよいものに雷電下25号住などの資料（前述）があるが、③の器種に該当するものではなく、③の資料的位置づけはまだ不安定にならざるを得ない。児玉地方の該期の良好な一括資料をもつ遺跡として、美里村日の森遺跡・岡部町地神祇遺跡などが知られている。遺物量も破格に多いので、今後報告書が刊行されれば、児玉地方の五領（石田川）式土器の変遷もかなり明らかになってくるであろう。

以上、本遺跡の出土土器を中心に、遺物の帰属すべき時期決定・派生する問題のいくつかを述べてきたが、事実報告を主旨とするため、本質的な議論を避け、資料的な問題に限定するように努めた。やや冗漫になったり、説明不足だったりする部分も多いかと思うが、いずれ機会を改めて本稿で扱った五領・和泉・鬼高式土器とその時代の諸問題について述べることにしたい。

（利根川章彦）

〔参考文献〕

- 井藤 翼他 1979『陶邑Ⅳ』 大阪府文化財調査報告書第31輯 大阪文化財センター
梅沢太久夫・高橋一夫・石岡憲雄 1978『原・清水南』 上里町教育委員会
梅沢太久夫・高橋一夫・中村倉司 1978『精神場遺跡』 神川村教育委員会
小沢国平 1958『児玉町庚申塚古墳発掘調査記録』 児玉町教育委員会
小沢国平 1969『児玉町金屋池脇遺跡』（『埼玉考古』第7号 埼玉考古学会）
小久保 徹・柿沼幹夫 1978『東谷・前山2号墳・古川端』 上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
小沢良樹・中村倉司 1980『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会報告第40集 埼玉県遺跡調査会
駒宮史朗 1974『中道・西北原遺跡発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第23集 埼玉県遺跡調査会
駒宮史朗・大和修 1979『本郷東・愛后』 関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会
坂本和俊 1978『ミカド遺跡の調査』（『第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会）
菅谷浩之 1972『西富田新田遺跡』 本庄市教育委員会
菅谷浩之・駒宮史朗 1974『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第20集 埼玉県遺跡調査会
菅谷浩之 1976『宮下遺跡・鍔之口遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会
菅谷浩之・坂本和俊 1977『北貝戸遺跡』 美里村教育委員会
菅谷浩之・金子章・山崎武・鈴木純・萩原恭一 1980『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
谷井彪・宮崎由利江 1980『烟中遺跡』 神川村教育委員会
中島宏・稻生美代子 1980『伊勢塚・東光寺裏』 上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集 埼玉県教育委員会
中村倉司 1979『宇佐久保遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第38集 埼玉県遺跡調査会
中村倉司・猿崎一 1980『雁姫神社前遺跡・一本松古墳』 埼玉県遺跡調査会報告書第39集 埼玉県遺跡調査会
増田逸朗・宮崎朝雄 1977『児玉町後張遺跡の調査』（『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古

学会)

- 増田逸朗・小久保 錠 1977 『塙本山古墳群』 関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ 埼玉県遺跡発掘調査報告第10集 埼玉県教育委員会
- 増田逸朗・小久保 錠・柿沼幹夫 1979 『下田・諏訪』 上越新幹線埋蔵文化財調査報告Ⅸ 埼玉県遺跡発掘調査報告第21集 埼玉県教育委員会
- 増田逸朗・胸宮史朗・宮崎朝雄 1980 『甘粕山』 関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ 埼玉県遺跡発掘調査報告第30集 埼玉県教育委員会
- 水島治平・榮崎起三雄・長谷川 勇 1976 『本庄市史』 資料編

付 載

I 児玉農工高校内試掘調査結果

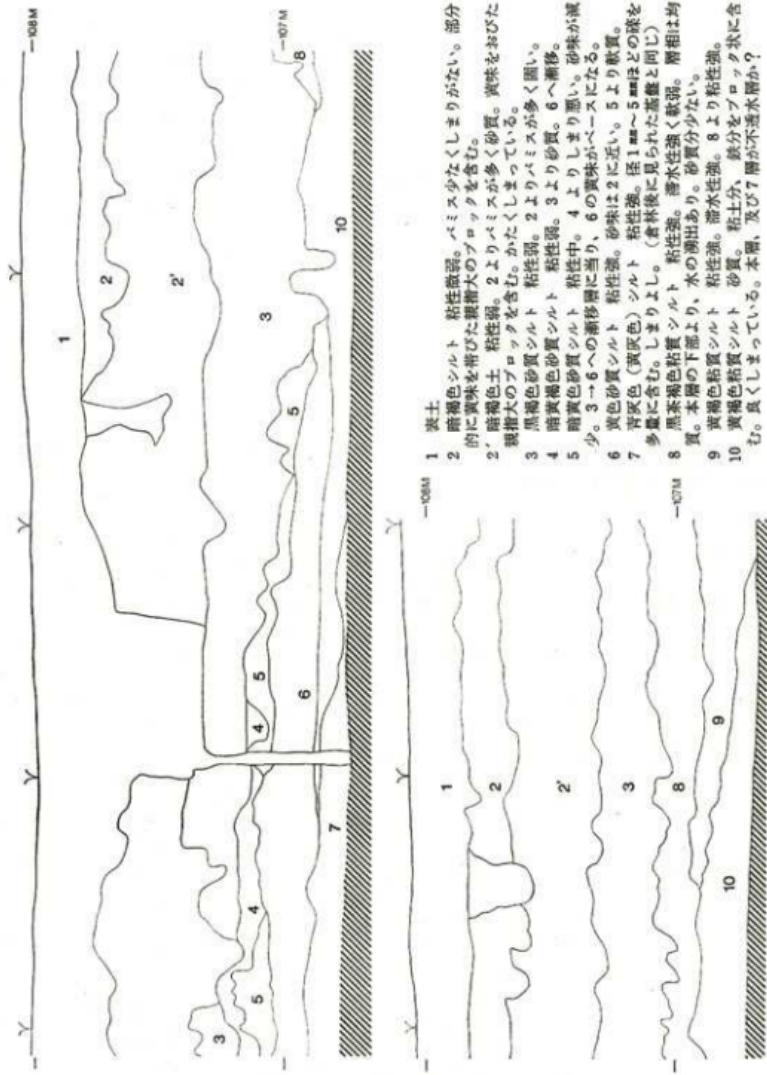
児玉農工高等学校の将来的整備計画に基づいた学校側の要請を受け、現豚舎周辺の遺跡の有無について確認のための試掘調査を実施した（第2図）。調査面積は約6,000m²に達するが、その中には豚舎三棟、牛舎、農業機械室、材料庫、物置等が散在し、それらを縫うようにして、14ヶ所、合計106m²の試掘を行った。

試掘調査範囲には、上記の建造物以外にも、園芸用樹木の苗畑などもあり、いずれの場合にも地山が大きく削平されるなど、原地表を残している所はほとんどなかった。このため、耕作土の下部にはすぐにハードロームが顔を出しているのが常で、遺構の検出も皆無であった。遺物は、大部分が植木鉢で、種に土器器の細片と思われるものが含まれる程度である。他には、陶器の破片と多量の糞滓が含まれている。いづれの場合も、出土状態は再堆積と考えられる。このように、試掘結果からは、良好な遺跡とするには消極的にならざるを得ない。

ここで、深掘りによって得られた知見に触れておく。第1図は14号トレンチ東壁のセクション図である。これを大局的に見ると、上層から下層に向って粘性は弱→強となるが、色調においては、左半と右半に差があることがわかる。すなわち左半では暗→暗→明であるのに対して、右半では暗→黒→明へと移り変わっている。この明度変化の原因を考えてみると、2号トレンチのセクションで観察されたような、本来黄褐色のハードローム層が何等かの影響で黒色を呈するようになったらしいことがわかる。その原因として最も有力なのは、水の作用である。水中に堆積した火山灰がよく黒色～鉛色を呈するのと同じ現象である。

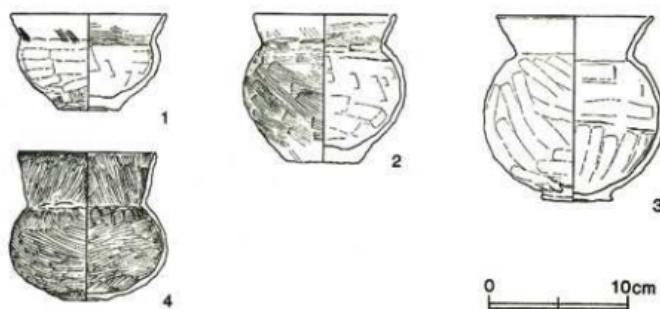
そうこうするうちに梅雨期の雨にたたられ、トレンチ内が水浸しになった。この過程を観察すると、上記の推定が当を得たものである可能性が高い。すなわち、地下に浸透した雨は、本セクション図右端の8層と9層の間から滲み出して來るのである。湧水量は蛇口を半ねりした程度だが、降雨後数日間にわたる湧水は、そこに伏流水の水脈が存在することを物語るものと思われる。このため水脈の影響を強く受ける黒味の強い8・9・3層などは水源から遠ざかるに従って層厚が薄くなり、いづれは消滅しているのである。おそらく、7・9・10層が不透水層となり、その若干の起伏によって水脈の位置が決定されているのであろう。3号や4号トレンチに認められた黒色土層の色調の差も、こうした現象の影響をどの程度受けているかに起因するのであろう。また、この現象は、倉林後遺跡深掘セクションでも認められたものである。

（山下秀樹）



付録第1図 14号トレンチ東壁セクション図

II 金屋池脇遺跡発掘資料



付載第2図 金屋池脇遺跡出土土器

金屋池脇遺跡は、故小沢国平氏が1962年に調査された遺跡で、方形周溝墓の検出された最も古い例の一つである。既にその概要是知られる所であるが、倉林後遺跡と地理的に近接し、時期的にもほとんど同時代であるということから、あわせて報告するものである。

(山下秀樹)

付載 2 金屋池脇遺跡資料観察表

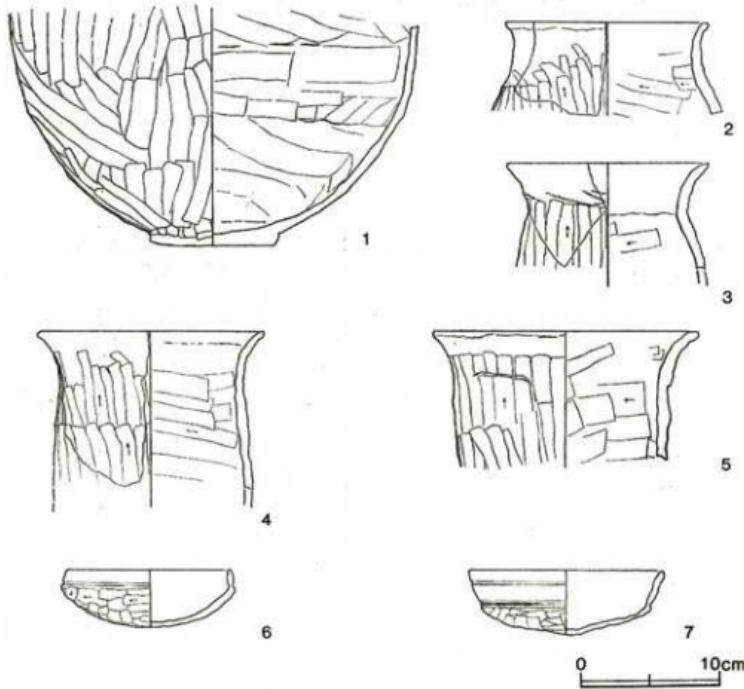
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 11.2 器高 6.9 底径 4.3	口縁部に最大径、外傾して立ち、端部は丸い。頸部弱くくびれ、体部は小さく張る。上げ底風の小さな底部へ急激にぼり上がりながら移行。整形丁寧。形態整う。	口縁部斜位。内面横位。斜位刷毛目。体部内外面横位窓ナデ。体部下端窓位乃至斜位刷毛目後窓削り、滑沢。底面窓削り、滑沢。胎土細。焼成良。淡赤褐色。	弱
鉢	2	口径 10.2 胴径 11.6 器高 10.6 底径 5.1	口縁外傾して立ち、端部は丸い。頸部弱く「く」の字にくびれる。胴部やや丸く、中位に最大径。底部平底。整形丁寧。形態整う。	口縁外面斜位刷毛目後ナデ。内面横位刷毛目後ナデ。頸部に窓痕一周。胴部外面斜位刷毛目、若干の重複あり。内面横位窓ナデ。底部内面指圧整形。底面窓削り。胎土細、ザラつく。焼成良。淡褐色。	口縁一部欠
壺	3	口径 11.2 胴径 12.8 器高 13.2 底径 5.0	やや長い口縁外反気味に立ち、端部は丸い。頸部「く」の字に屈曲。胴部は球形。平底の底部は中央やや凹む。整形丁寧。形態整う。	口縁部はナデ。胴部外面斜位窓削り、下端部は粘土のはみ出しを残す。内面上半部横位、下半部縦位窓ナデ、平滑。胎土細、ザラつく。焼成良。淡赤褐色。	ほぼ完
壺	4	口径 9.8 胴径 11.3 器高 10.55 底径 3.3	口縁若干外傾して立ち、端部外面に浅い沈線一周、端部は尖る。頸部弱く屈曲。胴部やや丸く、中位に最大径。小さな上げ底の底部。整形丁寧。形態整う。	口縁部内面斜位、胴部内外面横位。頸部および胴部下端外面窓位窓削き。頸部内面指押え後、横位窓削き。底面窓削き、外縁面取り全面滑沢。胎土細。焼成良、硬。淡橙褐色。丹塗か。	完

III 倉林英夫氏表採資料

この項に紹介する土器7点は、倉林英夫氏が自ら畠の耕作中に発見した土器群の一部である。倉林氏には児玉町教育委員会の三上元一氏を通じて接触し、「復元できそうもない」というものを贈与いただいた。その後、倉林後遺跡の遺物整理と共に、接合を試みた結果、図面化の可能なものを7点ピック・アップした。三上・倉林両氏に深謝したい。

さて、出土地点だが、倉林氏は児玉農工高校南側の倉林地内に家宅・耕作地を所有されているため、倉林後遺跡内あるいは隣接する集落跡から出土したものであることは間違いない。倉林後遺跡の継続期間を検討するに足る資料である。

(利根川章彦)



付載第3図 倉林英夫氏採集資料

付載 3

倉林英夫氏表探資料観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	胴径(29.2) 底径 8.9	胴部大きく張り、丸い。底部は平底。形態整う。	外面縦位乃至斜位窓削り。内面横位窓ナデ。底面も窓ナデ。胎土細。焼成良。淡赤褐色。	胴部下半のみ 全体の約
甕	2	口径(19.0)	口縁部に最大径あり、端部はつまみ出され、ゆるく外反。胴部は筒状か。器肉が厚く、整形あらい。	口唇部に粘土紐貼付痕。口縁部横ナデ。胴部外面縦位、内面横位窓削り、内面の仕上げはやや難。胎土やや粗、小石目立つ。焼成良、硬。淡褐色。	口縁部約
甕	3	口径(16.5)	口縁部最大径。形態の特徴は2と同じ。器肉やや厚く、整形やや丁寧。	口縁部内面に粘土紐貼付痕。調整手法は2と同じ。内面の仕上げはやや丁寧。胎土やや粗、小石目立つ。焼成良、硬。淡褐色。	口縁部約
甕	4	口径(14.5)	口縁部外反して立ち、頭部ゆるく屈曲。胴部は小さく張る。器肉やや厚く、整形丁寧。	調整手法は2と同じだが、仕上げはやや丁寧。頭部に窓底目立つ。胎土やや粗、小石多数。焼成良、硬。淡橙褐色。	口縁部約
甕	5	口径(14.8)	口縁部直立し、端部小さく外反し肥厚気味。胴部やや張る。器肉やや厚い。	調整手法・胎土・焼成・色調ともに4と同じ。ただし窓痕はない。	口縁部約
杯	6	口径 14.0 器高 4.7	口縁部は外傾して直立、体部との境と中位に段をもち、沈縫一周。部分的に二条になる。体部はやや扁平で、底部中央突出。	口縁部内外横ナデ。体部外面無方向窓削り。内面窓ナデ、平滑、若干窓痕あり。内外面黒色研磨か。胎土細。焼成良、硬。淡褐色。	全体の約
杯	7	口径 11.9 器高 4.2	口縁部は内彎気味に直立。体部との境に段を有し、沈縫一周。口縁部やや短めで、体部は丸いが、扁平化している。	調整手法は6と同じ。胎土細。焼成良。淡橙褐色。	全体の約

図 版

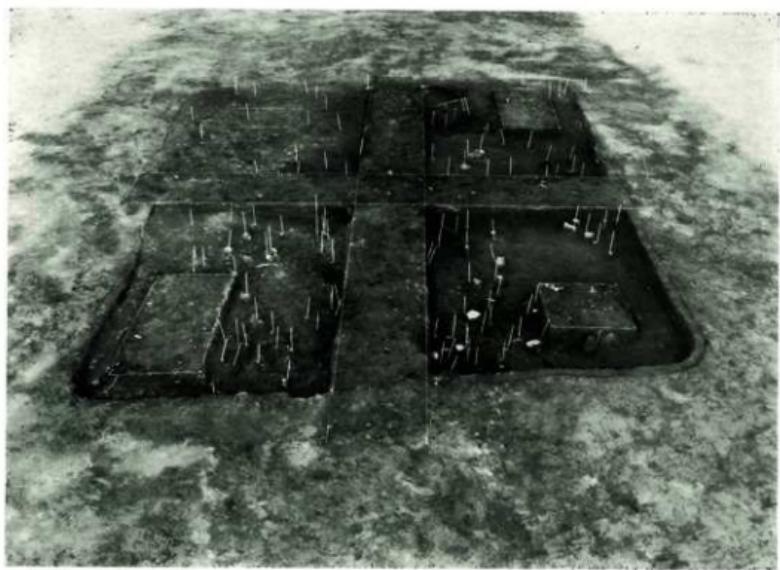


遺跡全景

図版 2



深掘セクション



住居跡 遺物出土状態



カマド前部 遺物出土状態



カマド周辺 遺物出土状態

図版 4



カマド右袖外側の遺物出土状態



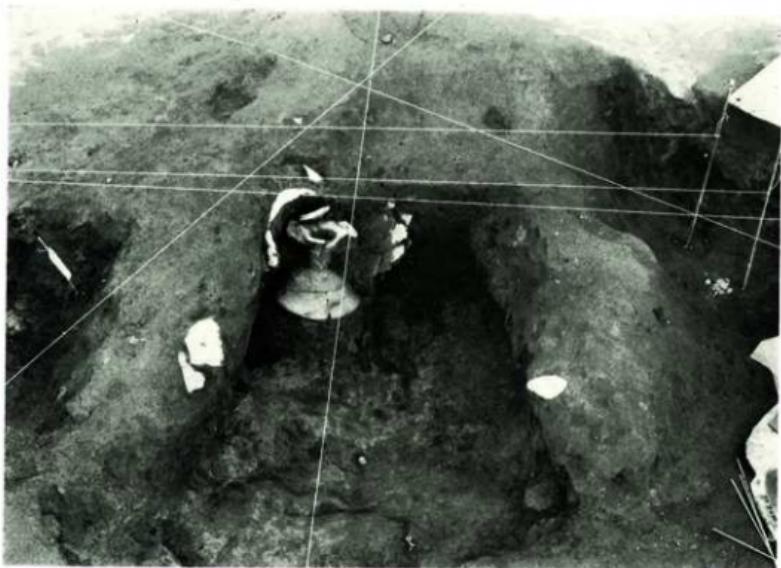
カマド周辺 完掘状態



カマド内 蕢出土状態



カマド内 蕢出土状態



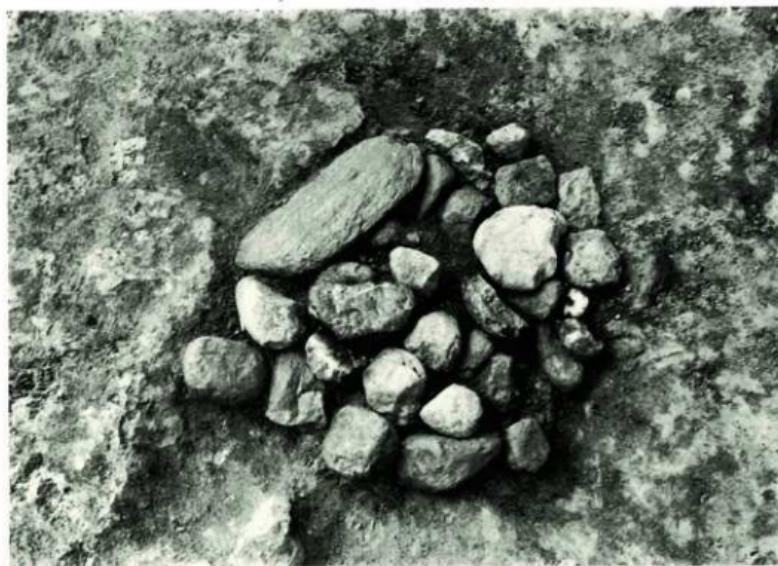
カマド内 支脚（高坏）出土状態



カマド完掘



貯藏穴内 遺物出土状態



集石出土状態

図版 8



住居跡 完掘状態



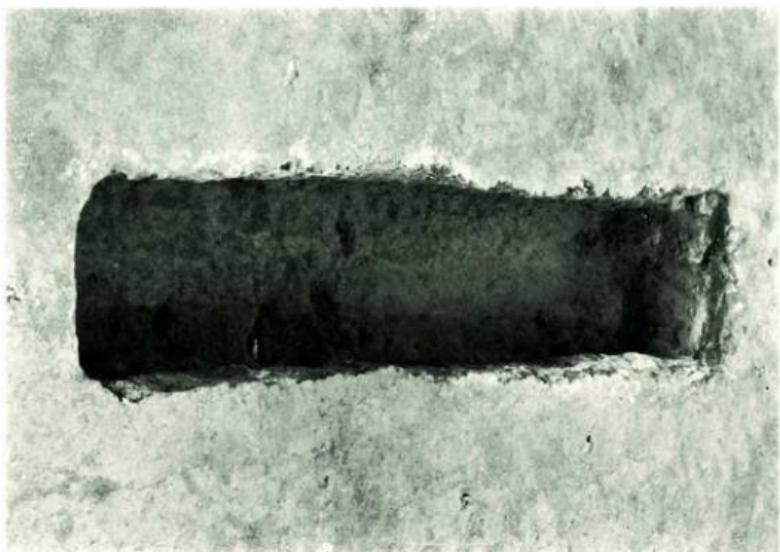
住居跡 たち割り



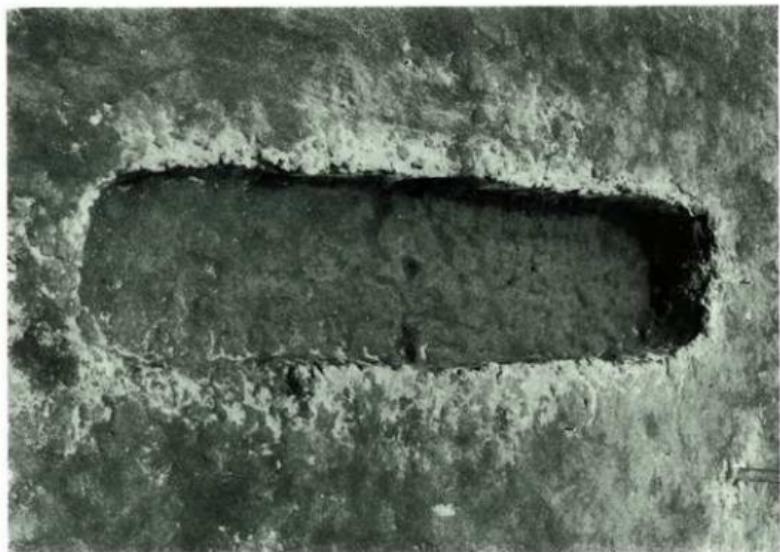
1号土壤



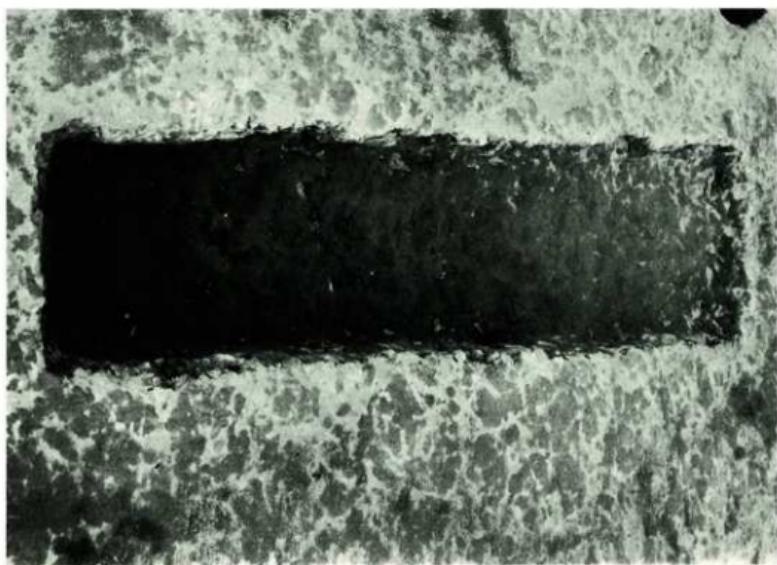
2号土壤



3号土壤



4号土壤

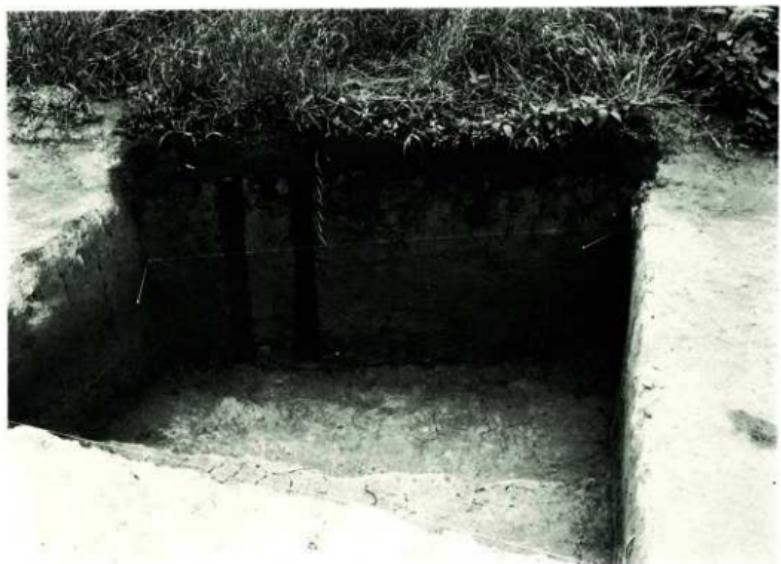


5号土壤



6号土壤

図版12



鉱物分析用土壤サンプル採取状態



遺跡完掘状態

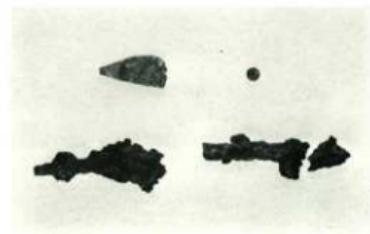


試掘 2号トレンチ

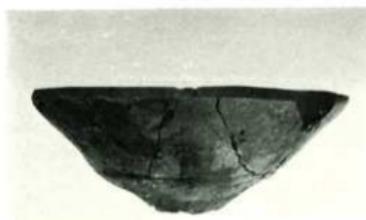


試掘 3号トレンチ

図版14



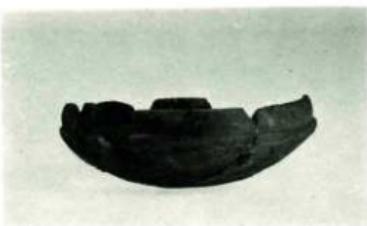
出土遺物



图版16



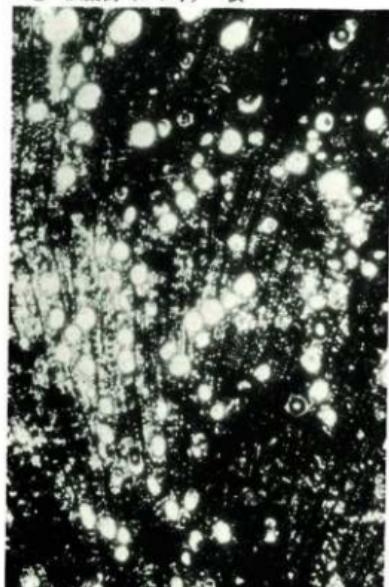
出土遗物



倉林英夫氏 採集遺物

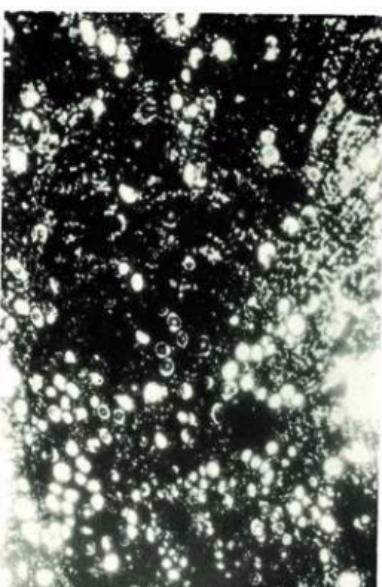
図版18

① 広葉樹(クリ?) 根



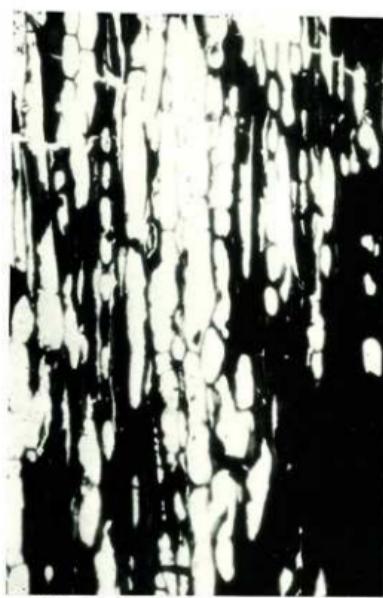
木口面

×50



木口面

×50



板目面

×240



根目面

×240

② カシ類一種



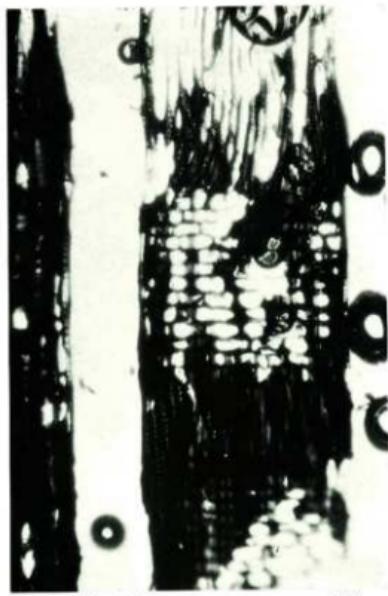
木口面

×50



板目面

×120

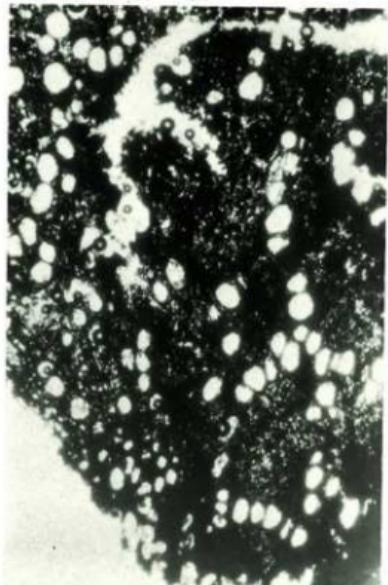


柾目面

×120

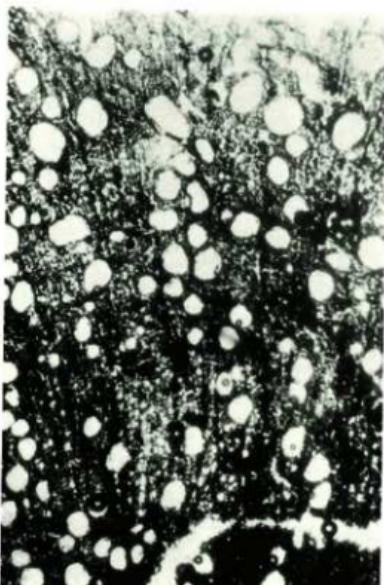
図版20

③ 広葉樹 根



木口面

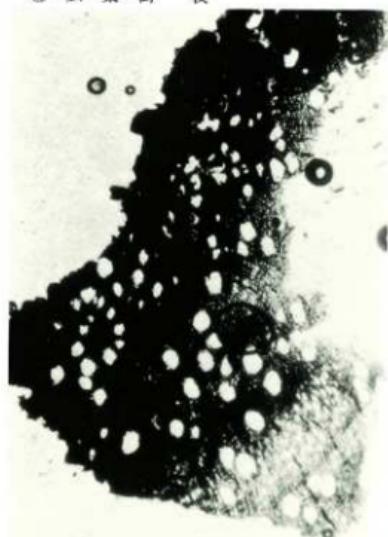
×50



木口面

×50

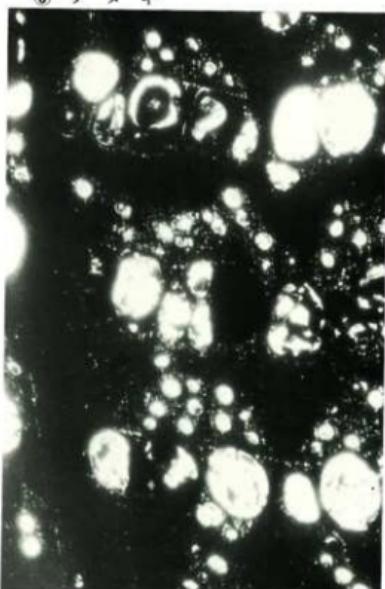
④ 広葉樹 枝



木口面

×50

⑤ クヌギ



木口面

×50

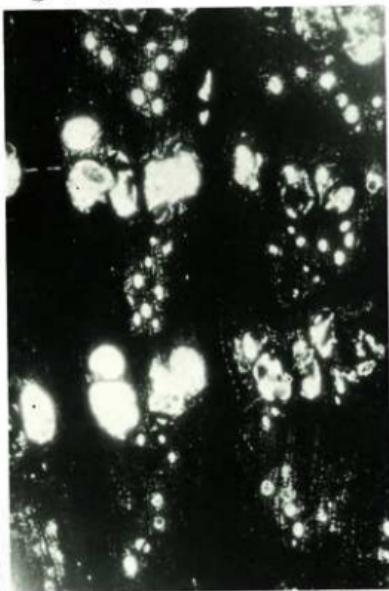
⑥ クヌギ



木口面

×50

⑦ クヌギ



木口面

×50

⑧ カシ類一属



木口面

×50

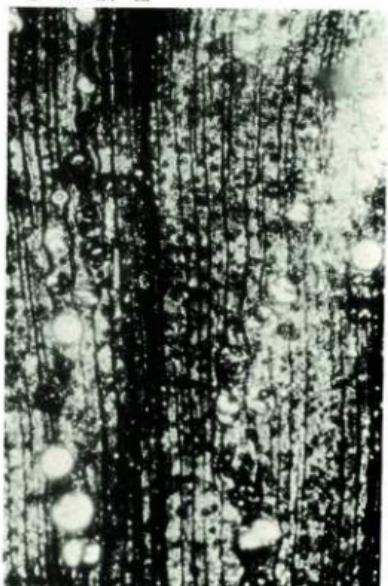


板目面

×120

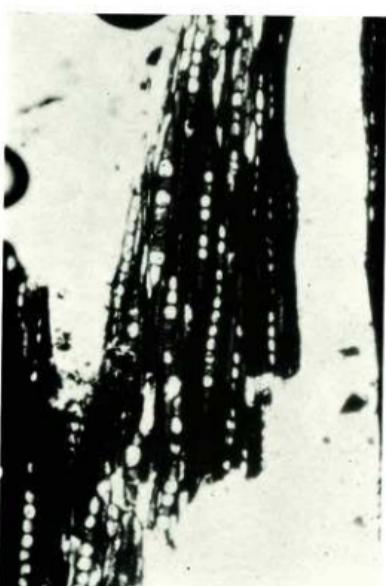
図版22

⑨ カシ類一種



木口面

×120



板目面

×120

⑪ カシ類一種



木口面

×50

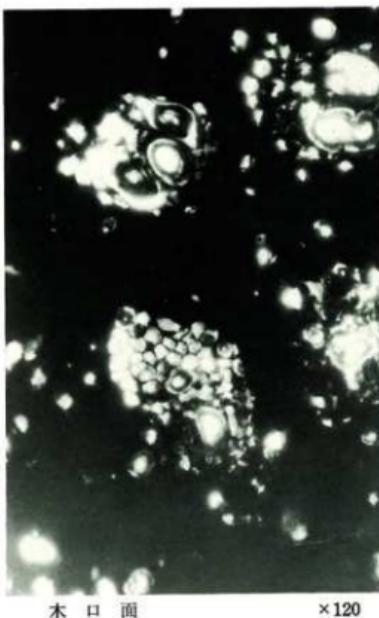
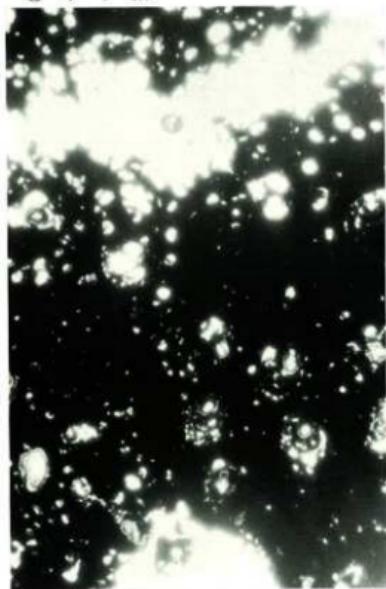
⑫ カシ類一種



木口面

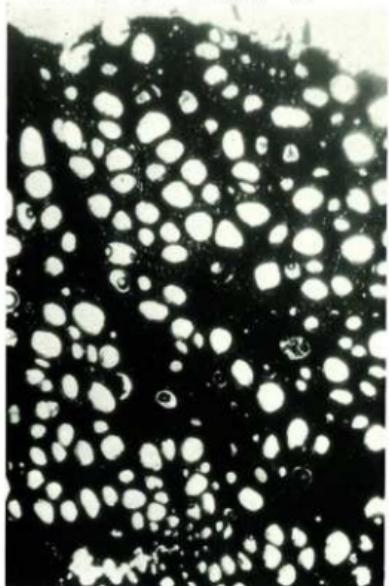
×50

12 単子葉



図版24

⑩ 広葉樹(コナラ属?) 根



木口面

$\times 50$



板目面

$\times 120$

⑪ 広葉樹 枝



木口面

$\times 50$

⑩ 広葉樹枝



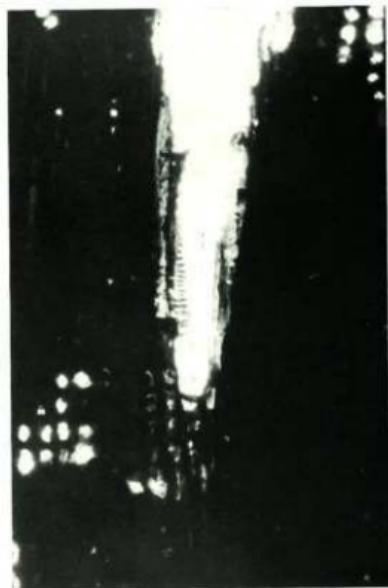
木口面

×50



木口面

×50



柾目面

×240

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第3集

倉林後遺跡

昭和56年3月20日 印刷

昭和56年3月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社 誠美堂印刷所